

AMIDADOU SITE

阿弥陀堂遺跡

V

—— 平成5年度埋蔵文化財第5次緊急発掘調査報告書 ——

1994. 3

茅野市教育委員会

序 文

阿弥陀堂遺跡第V次調査は、工場建設に伴い緊急発掘調査による記録保存を茅野市教育委員会が実施したものであります。

阿弥陀堂遺跡は昭和57年度から発掘調査が行われ、今回の調査が第5次調査となります。これまでの調査により、縄文時代中期、弥生時代、平安時代にいたる大規模な遺跡であることが判明しております。今回の調査は調査面積こそ少ないものでしたが、幾つかの成果がみられました。縄文時代後期の敷石住居址が検出され、縄文時代中期だけでなく、縄文時代後期にも集落が営まれていたことがわかりました。また、弥生時代後期、平安時代の集落の一部が検出されましたが、とくに平安時代の住居址が多く発見され、昭和57年度発掘地点と永明寺山の山裾までの間にも平安時代の集落が広がっていることが確認できました。阿弥陀堂遺跡は、茅野市域で調査例の少ない弥生時代、平安時代の集落の跡が残されている点で、重要な遺跡です。今後とも地道な調査を継続し、原始古代の茅野市の実体を明らかにしていきたいと思えます。

発掘調査にあたり長野県教育委員会など各関係機関、蓼科グリーンビュー開発株式会社の皆様の深いご理解とご助力により、発掘調査を無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成6年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角昭二

例 言

1. 本書は、長野県茅野市塚原1丁目2478-1に所在する阿弥陀堂遺跡の、工場建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、蓼科グリーンビュー開発株式会社からの委託を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘現場における記録および遺物、図面の整理、図版等の作成は担当調査員、赤堀彰子、木村圭子、平尾弘子が行ない、原稿執筆は、現場担当調査員がおこなった。遺物実測は担当調査員の他、守矢昌文、柳川英司が、墨書土器の赤外線写真は百瀬一郎が撮影した。
4. 出土品、記録は茅野市文化財調査室が保管している。
5. 報告書作成にあたり、諏訪考古学会会長宮坂光昭氏他、諏訪考古学研究会会員諸氏から御教示を賜わった。

目 次

序 文

例 言

第I章 調査経緯……………	1	第III章 遺構と遺物……………	6
第1節 発掘調査に至るまでの経過……………	1	第1節 縄文時代の遺構と遺物……………	6
第2節 発掘調査の方法と経過……………	1	第2節 弥生時代の遺構と遺物……………	10
第II章 遺跡の位置と環境……………	2	第3節 平安時代の遺構と遺物……………	11
第1節 調査の歴史と遺跡をめぐる環境……………	2	第4節 時期不明の遺構……………	23
		第IV章 結 語……………	26

第 I 章 調査経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

平成 4 年度、工場建設計画に伴い、蓼科グリーンビュー開発株式会社より埋蔵文化財に関する照会を受けた。茅野市教育委員会では工場用地が遺跡範囲内にあたることから遺跡保護の必要がある旨を回答した。用地内の遺構の密度を把握する必要があるため、あわせて試掘調査を行った。試掘調査において住居址 5 基、土坑 7 基が検出され、なお多くの遺構の存在が予想された。

試掘調査の結果により、事業地内にかかる 345㎡以上を発掘調査し、記録保存を図ることとなった。茅野市教育委員会は平成 5 年 9 月、市議会に補正予算案を提出し事業に備えた。補正予算案の議決を受け、平成 5 年 9 月 30 日付で蓼科グリーンビュー開発株式会社と埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託の契約を締結し、10 月 6 日より現地調査に入った。

第 2 節 調査の方法と経過

1. 調査の経過

本調査は 10 月 6 日より行い、用地内のうち建物部分を調査範囲とし、重機による表土剥ぎを行った。重機表土剥ぎの段階で黒色土中から平安時代住居址のカマドが検出されたため、カマドが検出された部分では重機による表土剥ぎをやめ、他の部分については確認面まで表土剥ぎを続行した。

10 月 7 日から遺構検出作業に入り、遺構内調査と平行して作業を進めた。10 月 13 日の時点で、住居址 7 基、土坑多数が検出された。調査は遺構検出時に、遺構重複関係で最も新しいと考えられた 7 号住居址と 1 号住居址から行った。住居址の調査は 10 月 22 日に終了した。住居址は調査後に新たに 3 基を設定した。

住居址の調査と平行して土坑の調査を行ったが、平安時代住居址確認面より下位に遺構が存在することが考えられたため、住居址完掘後の 10 月 25 日から 2 回目の遺構検出作業を開始した。住居址周辺は確認面のレベルが高かったため、住居址周辺を中心に 15cm から 30cm 掘り下げた。この結果多くの土坑が検出された。

土坑の第 2 回検出作業と同時に、住居址床面下の調査を行い住居址と重複した土坑、床下土坑を調査した。

平安時代住居址のカマドの調査を残し、10 月 29 日に全体写真を撮影した。平安時代住居址のカマドの調査は、土坑の第 2 回目検出作業とともに開始し、11 月 5 日に終了した。

遺構実測作業は、重複関係にある遺構について、遺構完掘後に最小限の実測を行ない、本格的に実測作業に入ったのは遺構内調査が全て終了した 10 月 29 日である。実測作業が終了したのは 11 月 15 日である。

遺物整理作業は、雨により現場作業が行なえない日や、現場作業終了後を利用して行なったが、本格的に整理作業に入ったのは 12 月からである。調査員、調査補助員とともに、遺物整理作業員が主として遺物水洗、注記作業、土器復元作業を担当し、調査員、調査補助員が図面整理、遺物実測作業、図版作成、報告書作成作業を行なった。

2. 調査の方法

遺構検出は、漸移層と黄褐色土層を確認面として行った。確認面の位置については第 II 章第 2 節で述べる。遺物出土状況などの記録は、写真と図面により行い、遺物が集中する部分については縮尺 1/10 の微細図を作

成した。住居址内の比較的大きな遺物については、平板測量により縮尺1/20の遺物分布図を作成したが、調査員の目が届かず取り上げてしまったものがある。他の遺物は遺構単位に取り上げ、遺構外の出土遺物はまとめて取り上げた。遺物の取り上げ作業は、調査員と調査補助員が行なった。

遺構の実測は縮尺1/20で平板測量により行い、調査員と調査補助員が担当した。調査区の位置は、1/500の現況平面図を用い平板測量により求めた。

3. 調査の体制

調査組織

調査主体者 両角昭二（茅野市教育委員会教育長）
事務局 原 充（茅野市教育委員会教育次長）
 永田光弘（茅野市教育委員会文化財調査室長）
 鶴飼幸雄（茅野市教育委員会文化財調査室係長）
 両角一夫（茅野市教育委員会文化財調査室主任）
 大月三千代（茅野市教育委員会文化財調査室主事補）
調査担当 守矢昌文（茅野市教育委員会文化財調査室主任）
 小林深志（茅野市教育委員会文化財調査室指導主事）
 小池岳史（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
 功刀 司（茅野市教育委員会文化財調査室主事）（現場担当、報告書作成）
 百瀬一郎（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
 小林健治（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
 柳川英司（茅野市教育委員会文化財調査室主事）

発掘調査・整理作業協力者

赤堀彰子 堀内潭 矢島恵美子（補助員） 今井芳博 木村圭子 平尾弘子

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 調査の歴史と遺跡をめぐる環境

1. 調査の歴史

阿弥陀堂遺跡をめぐる自然環境、歴史的環境については、第1次調査報告書に詳しいので、ここでは、昭和57年度以降に行われた阿弥陀堂遺跡の調査の概略を紹介する。

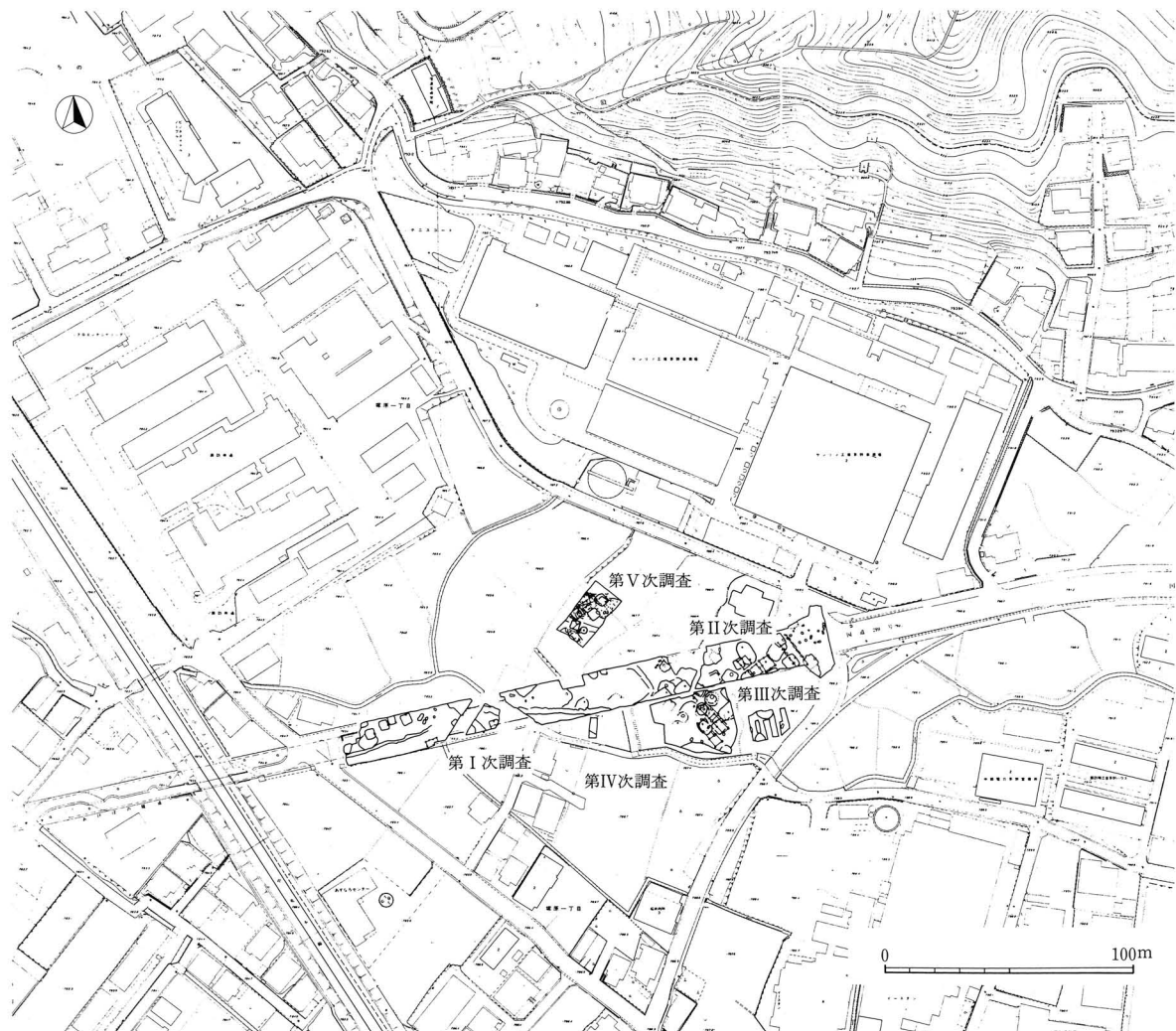
阿弥陀堂遺跡の発掘調査は、今回で第5次を迎える。第I次調査は昭和56年から昭和57年にかけて行なわれ構井遺跡とともに調査が行なわれた。第II次調査は平成2年、第III次調査は平成3年、第IV次調査は平成4年と、昭和57年度調査終了後の茅野有料道路開通以来、道路周辺の開発が頻繁になり発掘調査件数も増加した。調査契機となった開発行為は集合住宅建築、店舗建築であり、水田地帯であった遺跡地も、市街地化の波に洗われている（第1図）。

第1次調査以来調査された住居址は55基に達し、縄文時代中期から弥生時代、平安時代の大遺跡として認識されるようになった。茅野市教育委員会では第1次調査時に、遺跡現地説明会を開き、また遺跡に説明板を設置するなど、遺跡の重要性を訴える努力を続けてきた。

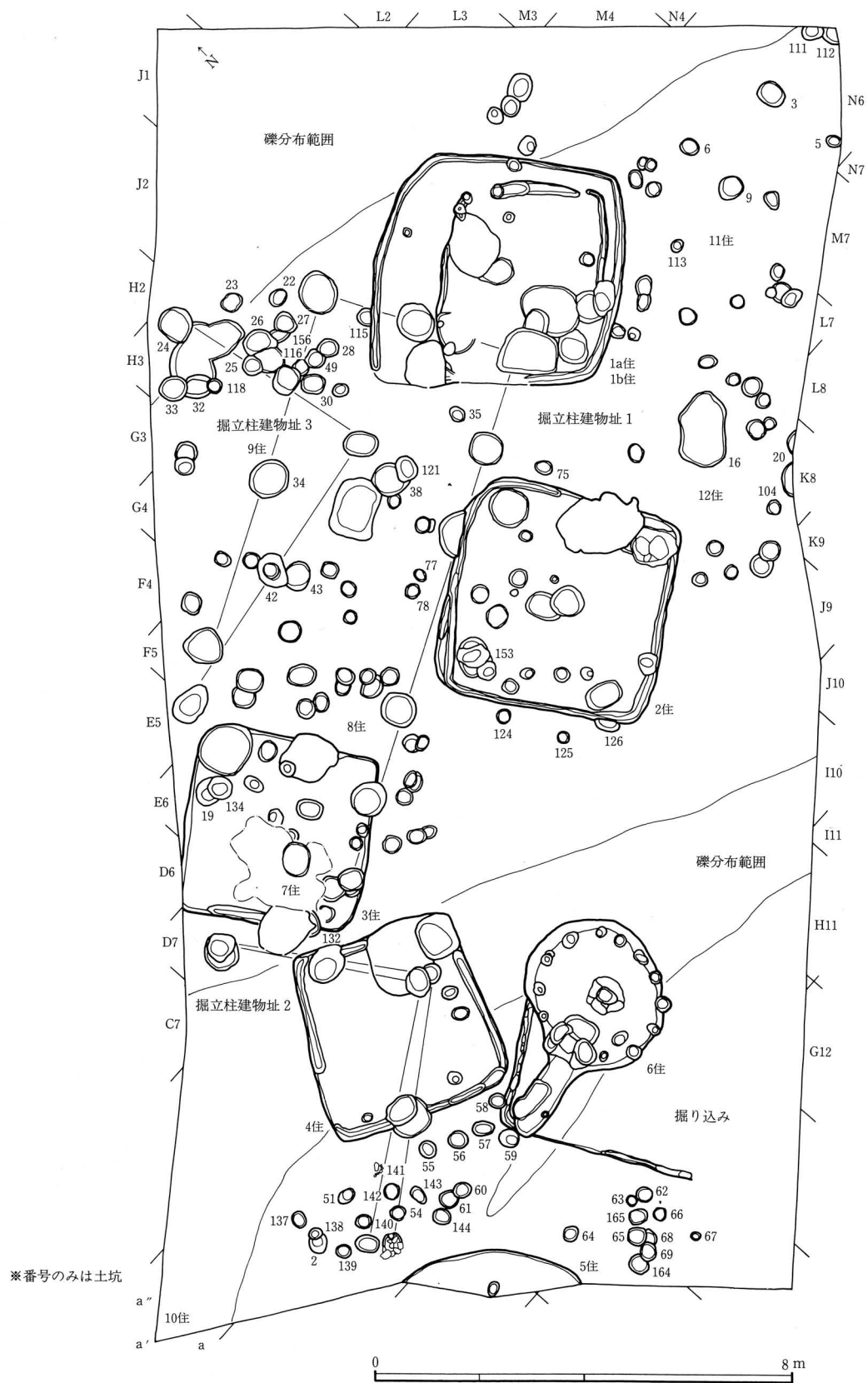
阿弥陀堂遺跡では縄文時代中期後半、弥生時代後期、平安時代の集落跡が発見されている。縄文時代中期後半の阿弥陀堂遺跡では、重複する住居址群とともに「掘立柱建物址」が検出されており、複数時期にわたり継続して集落が営まれていたことが判明している(小林 1993)。また住居址には第1次調査第20号住居址のように小型の住居址もふくまれており、遺構の構成は複雑なものであると考えられた(宮坂、守矢 1983)。第IV次調査までに、7基の縄文時代住居址が検出され、うち6基が縄文時代中期後半の住居址である。

弥生時代の住居址は重複せず散在している。第IV次調査までに18基が確認された。住居址平面形が2種類に分類され、地域的な系統差を考慮する必要があると指摘されている(宮坂、守矢 1983)。住居址以外の遺構には再葬墓と考えられる壺棺1基がある。諏訪湖周辺には、この形式の墓は確認されておらず、貴重な事例であると考えられる。

平安時代住居址は、29基である。平安時代の住居址には後半期の住居址が多いと指摘され、時期差がみられる(宮坂、守矢 1983)。第IV次調査においても、住居址の重複例や、カマドの位置から「かなりの期間にわたって継続して営まれた集落」であるとされている(小林 1993)。住居址の分布形態は、重複例が少なく散在するとされている(宮坂、守矢 1983)。住居址以外の遺構としては、掘立柱建物址4基、柱穴列1基がある。いずれも所属時期不明の遺構であるが、住居址との重複関係より平安時代以降に構築されたものである(宮坂、守矢 1983)。



第1図 遺跡の位置と周辺の地形 (1/3,000)



第2図 阿弥陀堂遺跡第V次調査遺構分布 (1/120)

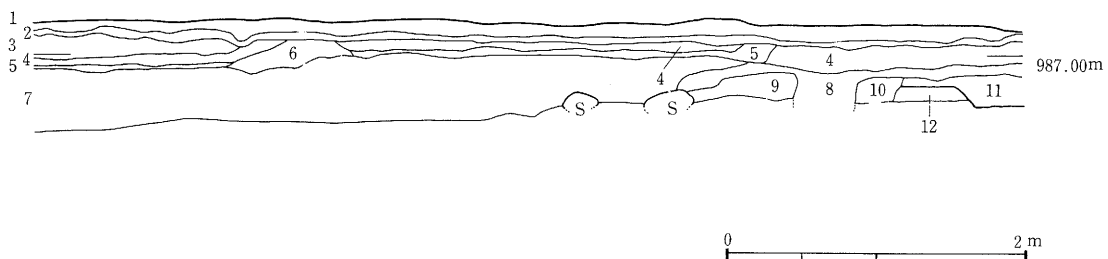
阿弥陀堂遺跡第1次調査では、中世、近世の遺物が出土し、なんらかの形で生活が営まれていたと思われるが、遺構が検出されない現段階ではその実体は不明であり、調査の課題として残されている。

2. 遺跡の層序

平安時代住居址カマドが確認されたのは暗褐色土上面(第3図⑦)から暗黄褐色土中(第3図⑨)であったが、縄文時代後期の住居址と土坑の一部が確認できたのは、黄褐色砂質土(第3図⑫)上面の高さであった。調査区北東の第1号住居址付近、調査区南側の第6号住居址の南では黄褐色砂質土を確認面としたが、他の部分では同じ標高に黄褐色土が分布していた。調査区北東隅及び南西の地山の上位から礫がまとまって検出された。特に第6号住居址付近と第10号住居址付近に多く、帯状をなして分布している。

基本層序(第3図)

- ①暗褐色土 粒子は細かく、締りがあって、粘性は弱い。ローム粒子、10cm以下の礫を少量含む。鉄分からなると考えられる赤褐色粒子をわずかに含む。
- ②赤褐色土 粒子は粗く、締りがあって、粘性は弱い。砂質土。
- ③黒褐色土 粒子は細かく、締りがあって、粘性は強い。ローム粒子を少量含む他、4cm以下でブロック状の灰白色土、12cm以下の礫を多く含む。
- ④黒褐色土 粒子は細かく、締りがあって、粘性は弱い。5cm以下の礫を少量含む。
- ⑤黒褐色土 粒子は細かく、締りがあって、粘性は弱い。鉄分によりわずかに赤味がかっている。水田床土。
- ⑥黒褐色土 粒子は細かく、締りがあって、粘性は弱い。5cm以下の礫を少量含む。鉄分によりわずかに赤味がかっている。
- ⑦暗褐色土 粒子は細かく、締りがあって、粘性は弱い。ローム粒子、5mm以下の炭化物、5mm以下の白色パミスを少量含む他、60cm以下の礫を多量に含む。
- ⑧赤褐色土 褐鉄鉱の層。
- ⑨暗黄褐色土 粒子は細かく、締りがあって、粘性は弱い。ローム粒子、60cm以下の礫、褐鉄鉱粒子を多く含む他、白色パミスを含む。
- ⑩暗黄褐色土 粒子は粗く、締りがあって、粘性は弱い。ローム粒子、40cm以下の礫を多く含む。砂質土。
- ⑪暗褐色土 粒子は細かく、締りがあって、粘性は弱い。ローム粒子、20cm以下の礫、5mm以下の炭化物を多く含む。住居址覆土の可能性はある。
- ⑫黄褐色土 粒子は粗く、締りがなく、粘性は弱い。60cm以下の礫を多く含む。礫は5cm以下が主体で、大きな礫は少ない。



第3図 調査区東壁断面図(1/60)

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居址

第6号住居址（第4図、図版1-1・2）

検出状況 調査区南側の礫が帯状に広がる部分で検出された。暗黄褐色土層を確認面とした。礫は覆土内に多量に含まれ、住居址の敷石などに用いられた礫と区別することが難しかった。いわゆる鉄平石以外は、礫の傾きと覆土内での位置、および全体の礫の配置などを手がかりに整理した。覆土は4層に分層された。

遺構の構造 部分敷石の柄鏡型住居址である。主体部は楕円形に近い円形である。張り出し部は、主体部の形状からみるとややずれた位置にある。張り出し部の中心を基準に主軸を求めると、主軸方向はN74°Eを向き、主軸線上での長さは4m38cmを測る。主軸長さのうち、張り出し部の長さは1m74cm、主体部の長さは2m74cmである。張り出し部の最大幅は65cm、住居址の幅は2m87cmとなる。残存壁高は28cmである。壁面の立上がりは緩やかに湾曲している。

炉址は主体部中央に位置し、方形の石囲炉である。底面には土器が敷かれており、薄い焼土がみられた。

張り出し部の礫は、鉄平石と円礫からなる。掘り方が張り出す部分に鉄平石が敷かれて、一段深い掘り込みがみられた。主体部と張り出し部が接する床面には、楕円形の礫と円礫によって配石が設けられていた（第4図、図版1-2）。配石の下部には、形状、深さともに柱穴とは異なるピットが検出された。ピットと配石の配置が一致することから、配石はピットの位置を意識して造られたものと思われる。配石は張り出し部からみて右手に湾曲しており、あたかも通路のように配置されていた。掘り方底面は平坦で、張り出し部と主体部の境界にはわずかに段差がみられる。柱穴は壁際を巡る。主体部では、炉址奥壁側と南壁際の一部から敷石が検出された。敷石にはいわゆる鉄平石と平坦な面をもつ河原石が用いられている。住居壁際では円礫が積み重ねられたかのような状態で検出された。住居址東半の壁際で多く確認され、住居址奥壁では2段以上は積み重ねられていたと思われる。

遺物の出土状況 覆土に含まれる遺物は少なく、少量の土器片と黒曜石剥片が出土したのみであった。炉址覆土からは礫と土器破片が出土した。炉址底面には、大型の土器破片（第4図1）が敷かれていた。

出土遺物 堀之内I期の深鉢胴部（1）の他、注口土器の破片であると考えられる資料が出土した（8～10）。覆土からは曾利IV期の土器破片（2～6）も出土している。

遺構の時期 炉址内に残された土器破片から、堀之内I期であると考えられる。

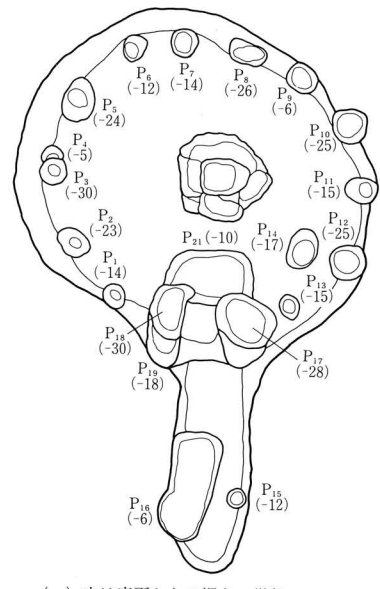
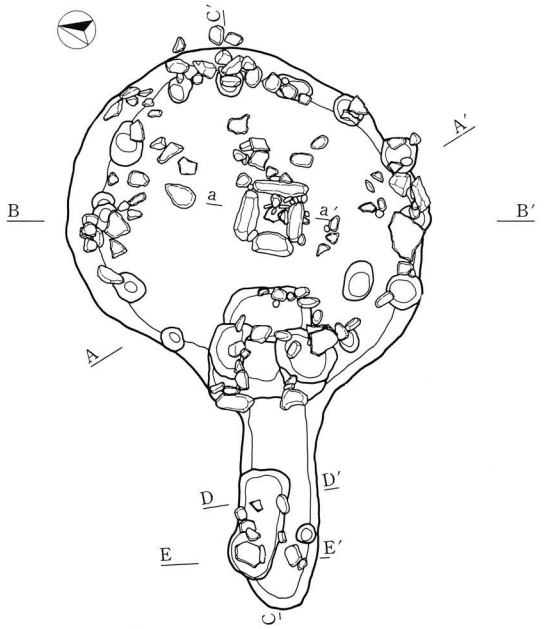
第8号住居址（第5図）

検出状況 図面整理作業中に柱穴の配置から判明した住居址である。確認面は暗黄褐色土層下部である。平安時代の第3号住居址と重複し、床面下から柱穴の一部が検出された。床面や炉址などは検出できなかった。

遺構の構造 柱穴の配置から、平面形は楕円形あるいは隅丸長方形であると考えられる。柱穴配置から、主軸方向が短いつぶれた形状であったと思われる。柱穴間の距離は、主軸方向で約2m90cm、主軸に直交する最大幅が約3m70cmである。P₁₉からP₂₁の位置からみると、張り出し部が存在していた可能性がある。

柱穴間の距離と配置から、建て替えかあるいは2基の住居址の重複であると考えられる。

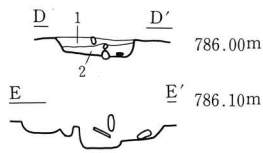
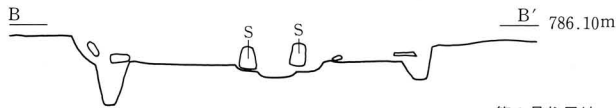
遺物の出土状況 住居址に伴うと考えられる遺物はない。



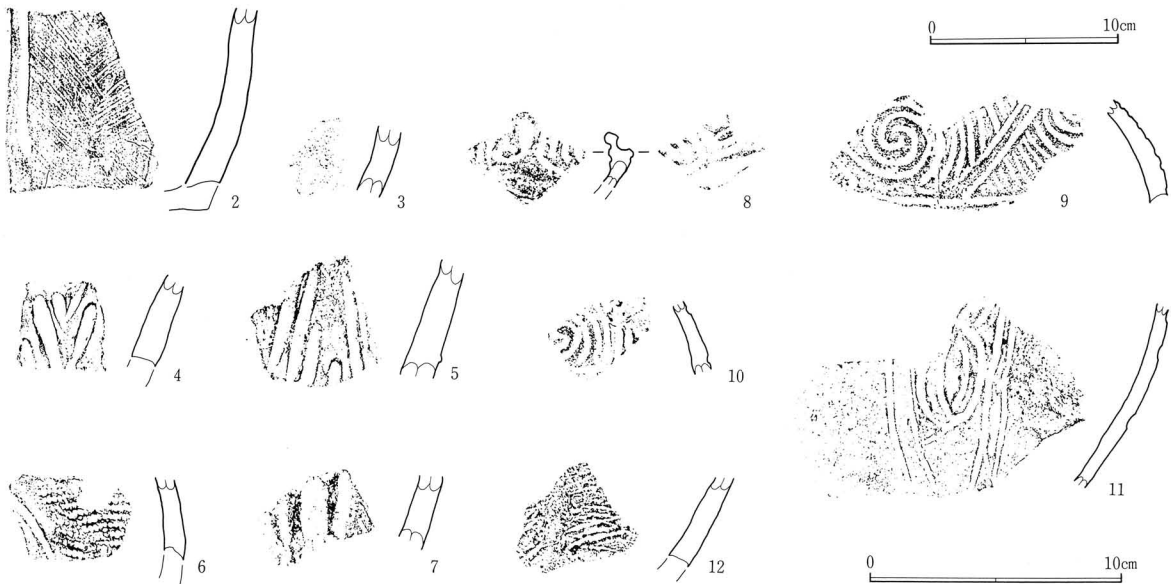
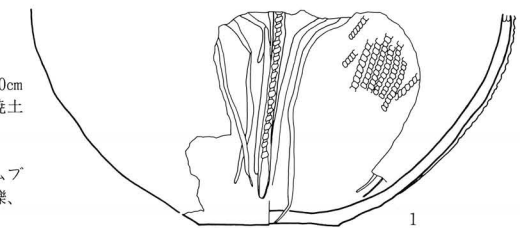
() 内は床面からの深さ。単位cm。



第6号住居址炉址覆土
①黒褐色土
ロームブロック、礫、炭化物、焼土を含む。



第6号住居址
張り出し部覆土
①暗褐色土
ロームブロック、10cm以下の礫、炭化物、焼土を含む。
②黄褐色土
ローム粒子、ロームブロック、8cm以下の礫、炭化物を含む。



第4図 第6号住居址と出土遺物 (1/60、1~12 1/3)

遺構の時期 横浜市山田大塚遺跡（石井他 1990）や立石遺跡（小池 1994）で検出された住居址の例（小池 1994）を参考にすると、柱穴配置から縄文時代中期末から後期に属す住居址であると考えられる。

第9号住居址（第5図）

検出状況 整理作業中に判明した住居址である。柱穴はほぼ全周するが、欠けている部分がある。第8号住居址と同様な柱穴配置をなす住居址であると判断した。柱穴の確認面は暗黄褐色土下部である。

遺構の構造 住居址平面形は横に長い楕円形であると考えられる。床面や炉址などは検出されなかったが、平安時代の第1号掘立柱建物址P₁₀の覆土から焼土が検出されており、第1号掘立柱建物址が建築された時に、本住居址の炉址を破壊した可能性が想定できる。

遺物の出土状況 出土遺物はない。

遺構の時期 第8号住居址と同じ理由で、縄文時代中期末から後期に属す住居址であると考えられる。

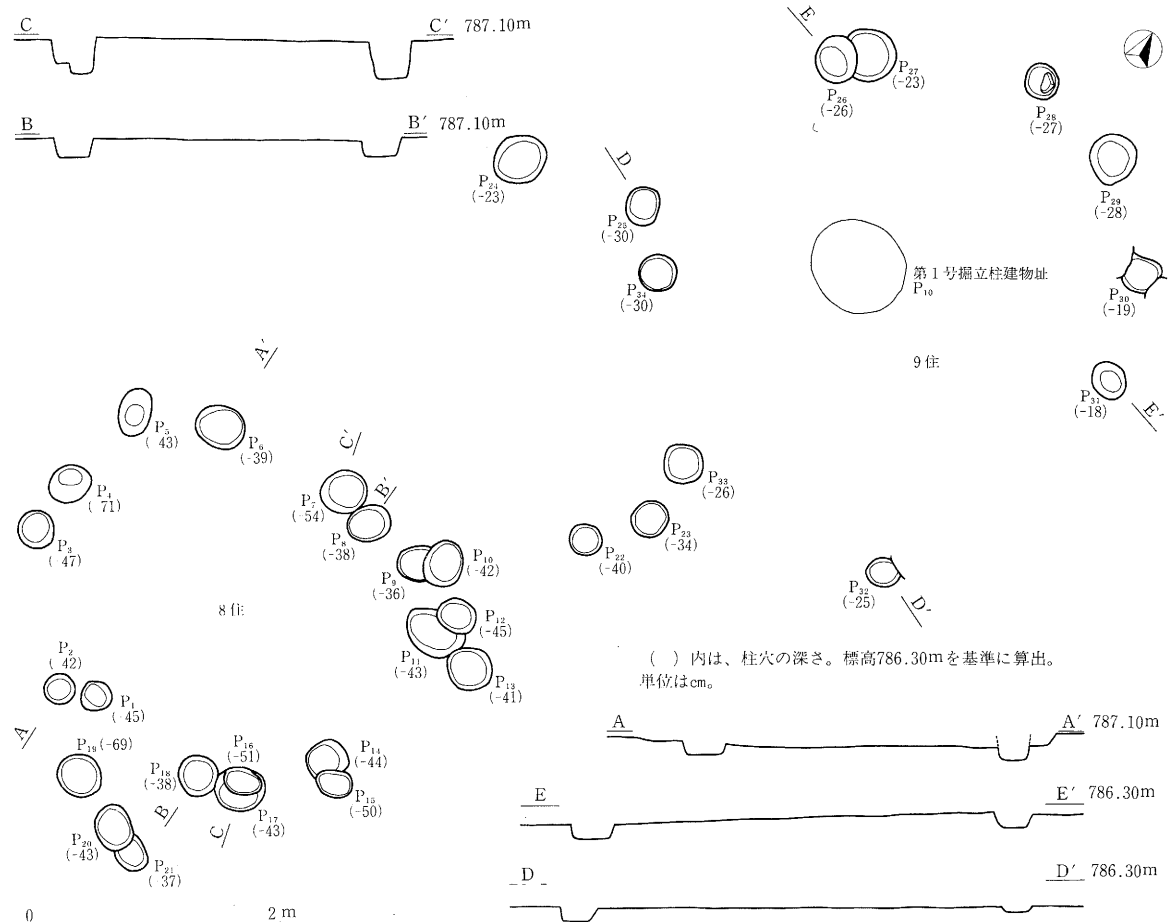
第11号住居址（第6図）

検出状況 図面整理作業中に、柱穴の配置から判明した。柱穴の確認面は暗黄褐色土下部である。床面や炉址などは検出できなかった。

遺構の構造 平面形状は、柱穴の配置から楕円形であると想定される。特にP₄とP₅およびP₁とP₈の距離が短い。柱穴が対称に配置されることから住居址と考えた。

遺物の出土状況 出土遺物はない。

遺構の時期 不明である。



第5図 第8号、9号住居址 (1/60)

第12号住居址（第6図）

検出状況 図面整理作業中に、柱穴の配置から判明した。柱穴の確認面は暗黄褐色土層下部である。柱穴は全周しないが、全体の配置が弧をなすことから住居址である可能性が高いと判断した。

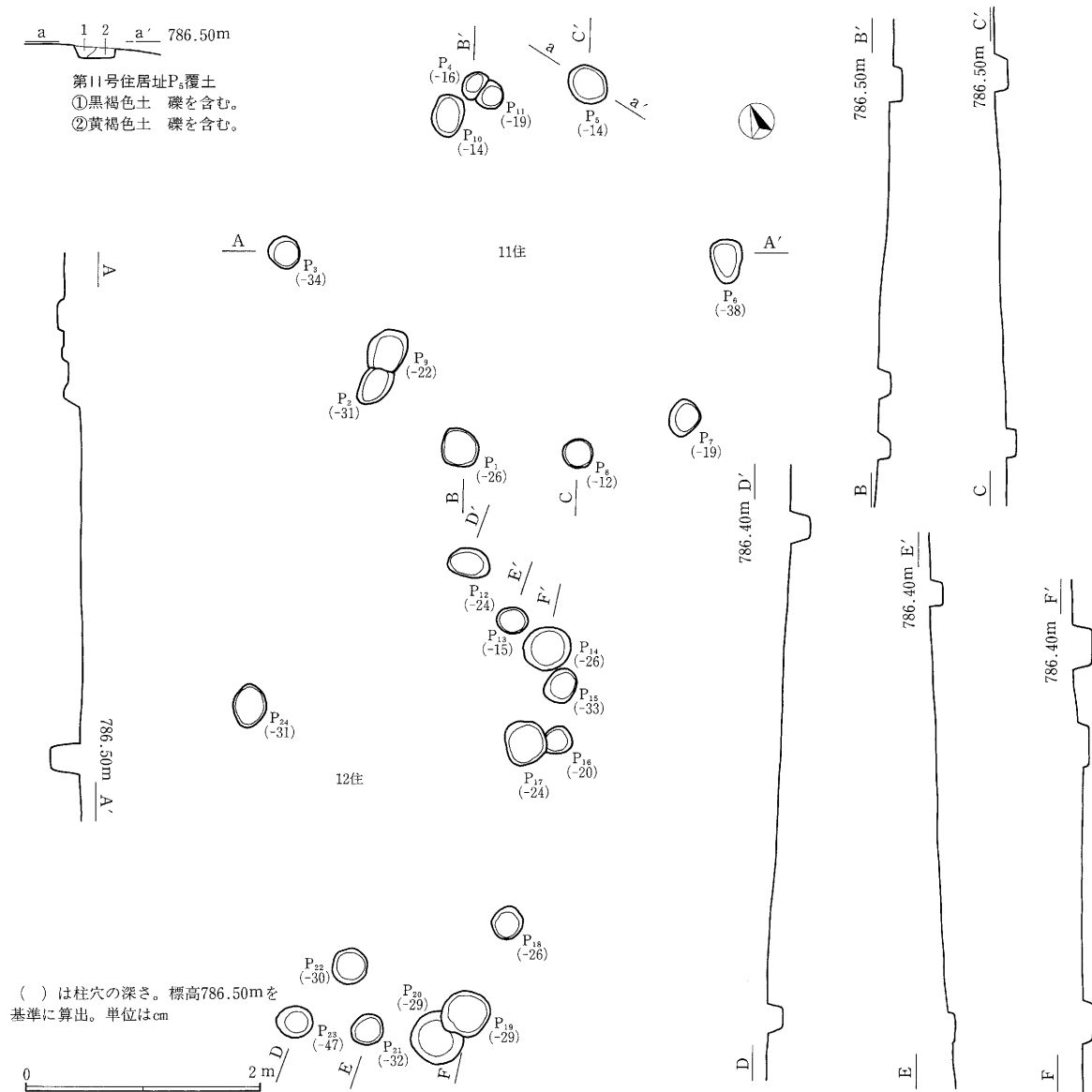
遺構の構造 平面形状は、柱穴の配置から横に長い楕円形か隅丸長方形であると想定される。床面、炉址などは検出されなかった。柱穴の数からみて、複数の住居址が重複していると考えられる。

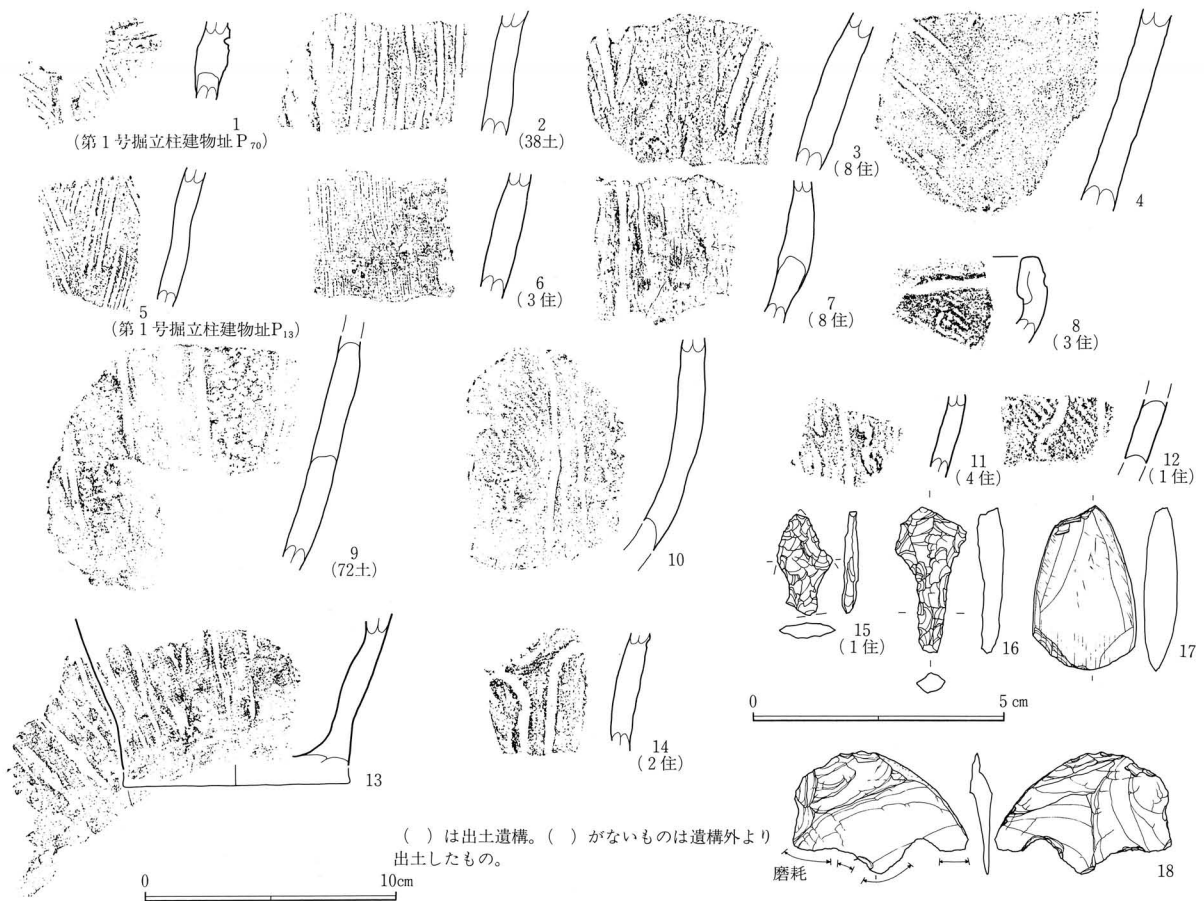
遺物の出土状況 出土遺物はない。

遺構の時期 第8号住居址と同じ理由で、縄文時代中期末から後期に属す住居址であると考えられる。

(2) 遺構外出土遺物（第7図）

縄文時代の遺構外および縄文時代以外の住居址から出土した遺物では、中期後半の土器を主体とする、曾利Ⅱ期から曾利Ⅴ期の土器が出土し（第7図）、全体の出土量からみると加曾利E系の土器が多い。石器は黒耀石製の石鏃（15）、石錐（16）各1点、両極打法による石器3点と剥片少量の他、磨製石斧（17）、堆積岩を用いた横刃型石器（18）各1点が出土した。横刃型石器の刃部は抉り以外の部分に摩耗痕が観察された。





第7図 縄文時代の遺物 (1/3、15~16 2/3)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住居址

第5号住居址 (第8図、図版1-3)

検出状況 調査区南西際で検出された。確認面は暗黄褐色土層下部である。住居址の大部分は調査区範囲外にかかっており、一部を調査したにすぎない。覆土は1層である。確認面に焼土が分布し、同じ範囲から炭化物が集中して検出された。

遺構の構造 平面形は楕円形か長楕円形であると思われる。確認できた残存壁高は、11cmである。壁の立上がりは、緩やかに湾曲している。床面はやや軟弱で暗黄褐色土内に設けられ、調査した範囲では床面の堅さに変化はみられなかった。

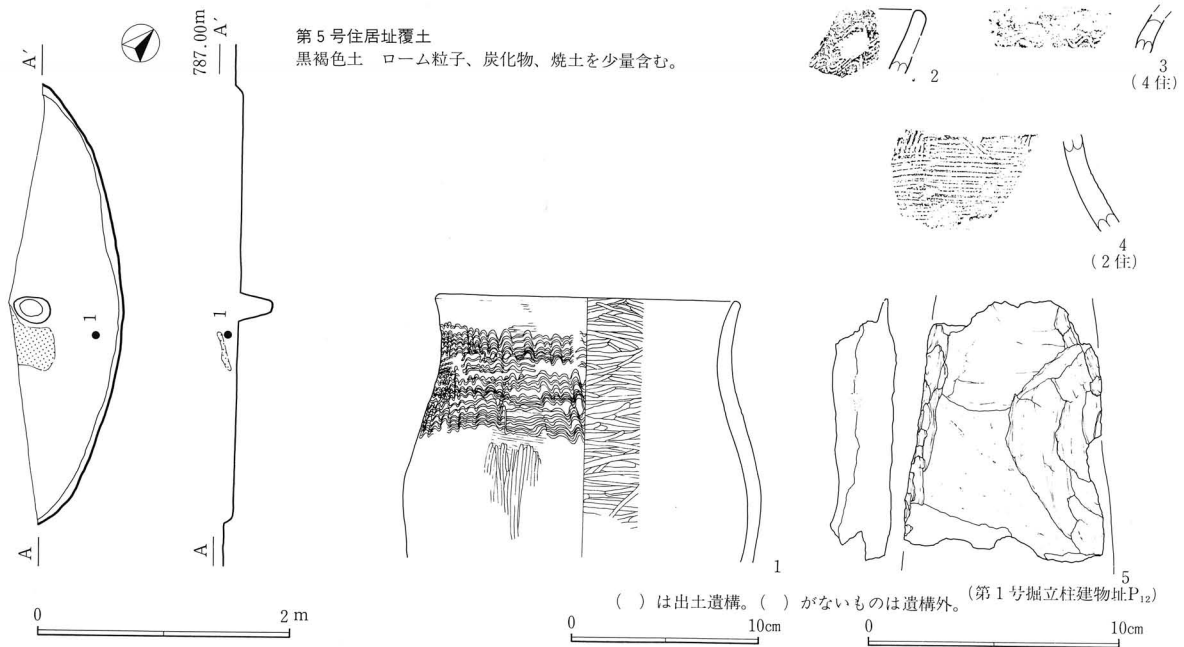
遺物の出土状況 壁際から甕の破片が出土した。焼土層とほぼ同じ高さから出土している。

出土遺物 甕(第8図1)1点のほかに、弥生式土器破片が少量出土している。

遺構の時期 覆土出土の甕から、弥生時代後期の住居址であると考えられる。

(2) 遺構外出土遺物 (第8図)

平安時代の遺構から出土したものを含めても、弥生時代住居址以外から出土した遺物は少ない。櫛描波状文が施された甕の口縁部(2)と頸部の破片(3)、壺の頸部破片(4)がある。また平安時代第1号掘立柱建物址の柱穴から硬砂岩製の石鍬の破損品が出土している(5)。破損部位は刃部と基部で、左側縁には潰しが加えられている。調整からは縄文時代の打製石斧との識別は難しいが、縄文時代の打製石斧に比べ、すこぶる大型であることから弥生時代の石器であると考えられる。



第8図 第5号住居址と弥生時代の遺物（住居址 1/60、1 1/4、2～5 1/3）

第3節 平安時代の遺構と遺物

(I) 住居址

第1a号住居址（第9・10図、図版2-1～3、4-2）

検出状況 暗褐色土層で検出された。第1b号住居址および第1号掘立柱建物址と重複する。本住居址の床面下より第1b号住居址が、第1号掘立柱建物址 P_2 が本住居址の貼床下から検出されたことから、本住居址が第1b号住居址、第1号掘立柱建物址より新しい。覆土は2層に分層できた。

遺構の構造 平面形はほぼ隅丸方形を呈するが、全体に歪んでいる。主軸方向は $S48^\circ W$ 、規模は主軸の長さ4m35cm、幅が4m75cm、残存壁高は17cmである。床面積は18.4 m^2 を測る。立上りは明瞭である。

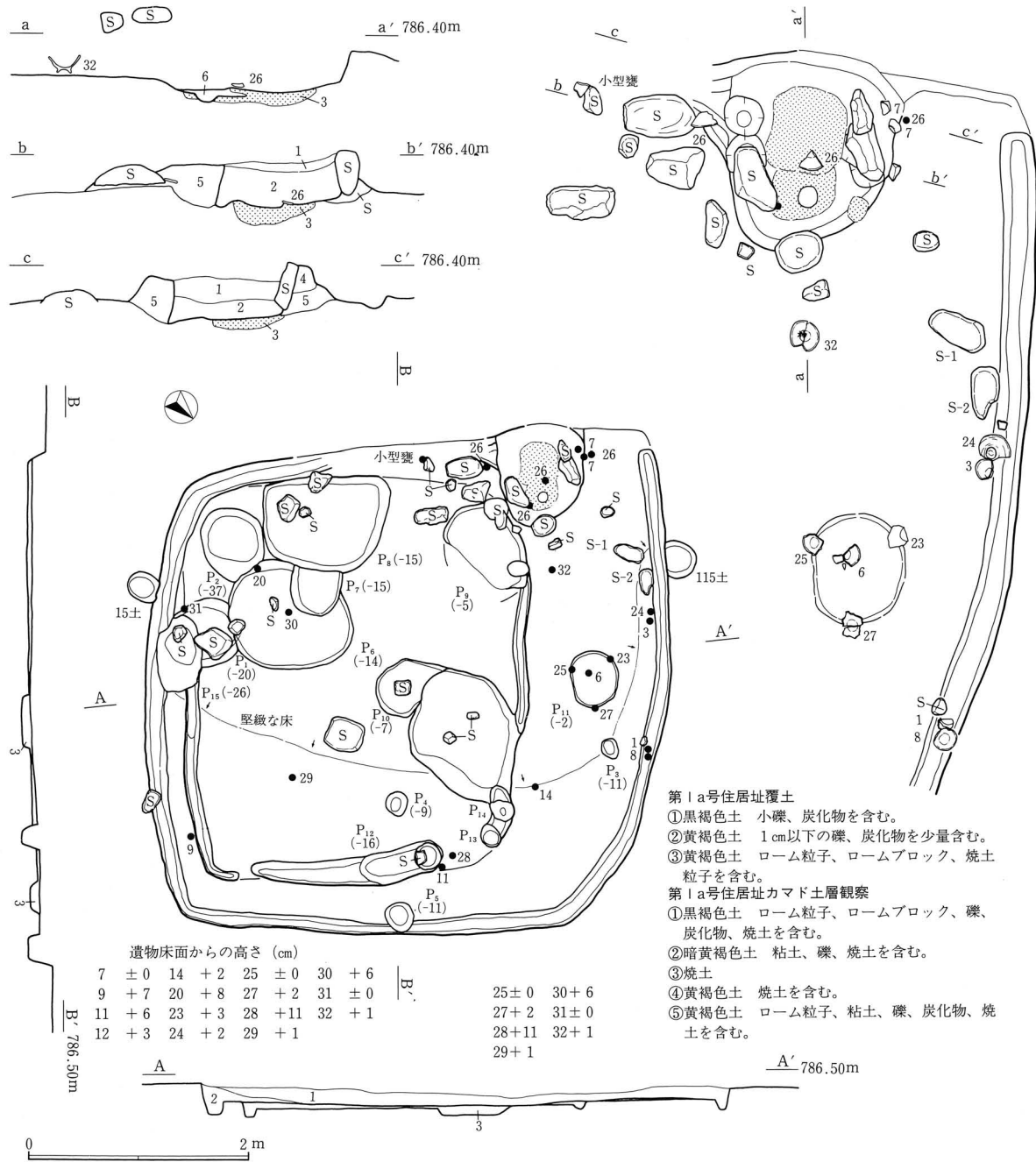
カマドは住居址北東隅に設けられていた。石組粘土カマドである。天井石、支脚はなく、左袖脇に袖の芯材として用いていたと思われる礫が散乱していた。奥壁は、住居址の壁をわずかに掘りこんでいる。火床の焼土層は焚き口側で2層に分れていた。焼土層は黒色土層をはさみ、火床中央で1つになっている。

床面はカマド前面から住居址中央部が堅緻で、壁際は軟弱であった。住居址北東の壁は、黄褐色砂質土中に構築されていたためか、床面と壁の立上りは不明瞭であった。床面は住居址中央部がわずかに低い。周溝は全周し、特に南東壁面下で深くなっている。土坑が多数検出されたが、本住居址の支柱穴と考えられる土坑は確認されなかった。 P_1 から P_4 の上面には貼床が見られなかった。 P_{11} は上面に貼床がなされ、土坑の縁辺と中央に遺物が集中していた。 P_6 、 P_7 、 P_8 は床下土坑であり、 P_9 の覆土中には灰、焼土が含まれていることから灰捨て穴であると思われるが、 P_8 、 P_9 は検出位置から考えると第1b号住居址の遺構である可能性が強く、他の床下土坑の帰属も判然としない。 P_{12} の上面からいわゆる鉄平石が出土した。

遺物の出土状況 遺物の出土量は多い。遺物の分布状態は、カマド周辺に集中する傾向を示す。垂直分布で土層との対応関係はみられなかったことから、床面からの高さを表示した(第9図)。住居址中央近く、床面から離れて出土した灰釉陶器碗(28)以外のほとんどの遺物が床面に伴うものとみられる。カマド右脇から楕円形の河原石による配石が検出された(第9図5-1・2)。礫の上面には、敲打痕に類似した使用痕跡が観察され

た。配石から住居址北隅の壁際にわたる範囲より完形、半完形の土師器環、高台杯がまとまって出土した。カマド焚き口前面の床面から、墨書のある灰釉陶器碗が正位の状態でも出土した(図版2-2)。この灰釉陶器は、カマドに対座する位置からみて墨書が正位になるように置かれていた(第9図、第10図32)。遺物分布密度が比較的薄い南東壁際中央の床面からは破損した緑釉陶器皿(31)が出土した。住居址中央の床面から上面が平坦な礫が出土した。他の礫も床面からの出土であり、本住居址にともなうものと考えられる。

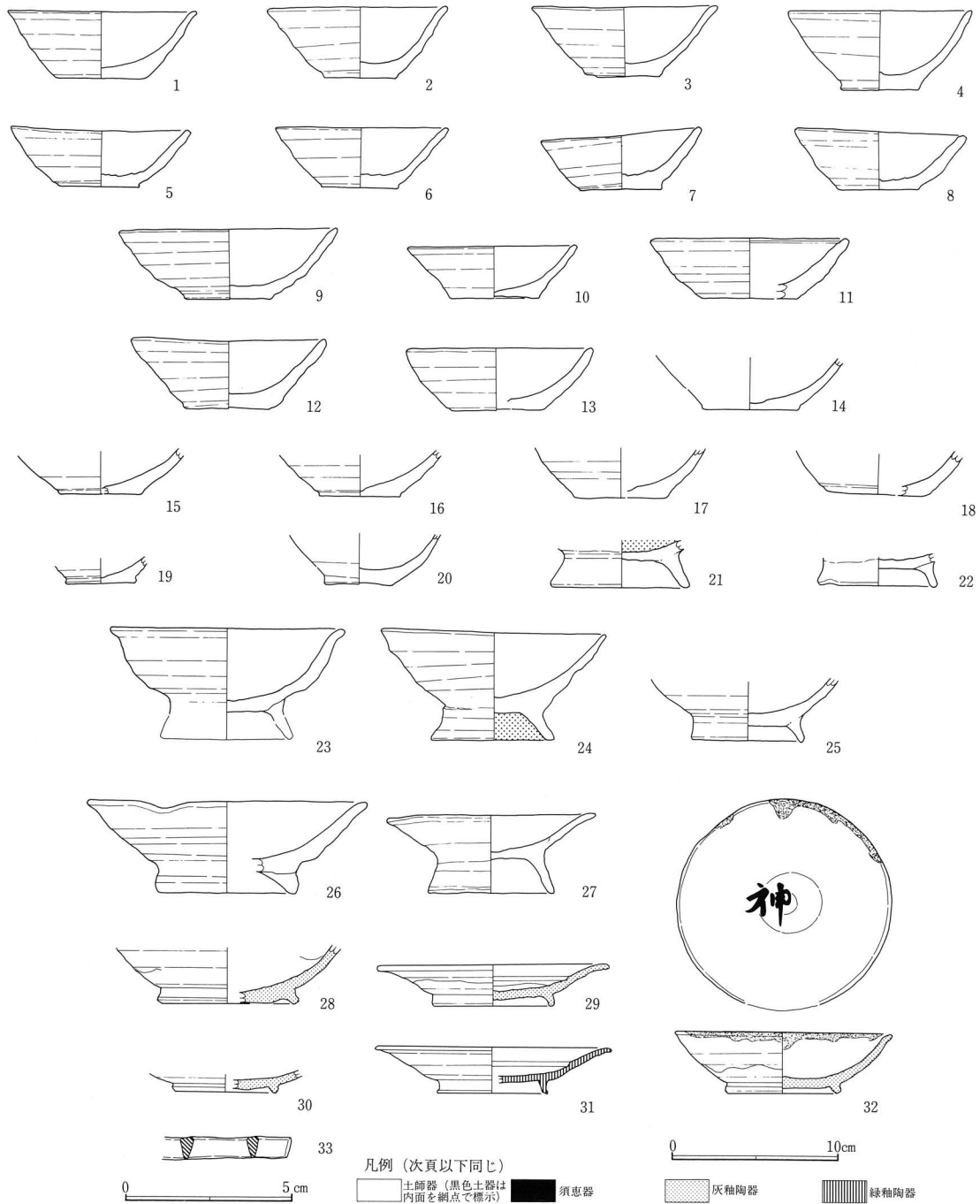
出土遺物 土師器では甕と小型甕の破片、杯、高台付杯、高台付皿が、灰釉陶器には碗、段皿がある。他に黒色土器高台付杯、緑釉陶器皿、須恵器甕の破片が少量出土した(第10図)。供膳形態の土器が主体を占め、特に土師器杯が目立つ。土師器杯は法量や器形から、分類が可能である。1から4は体部に丸みを持ち、口縁部が引出されたように外湾する。9の器形は1から4と同じであるが、法量が大きく、より外傾する。出



第9図 第1a、1b号住居址と遺物分布 (1/60、カマド 1/30)

土数は1点である。5から8は体部に丸みをもつが口縁はわずかに外反する程度である。10から13は体部が外反気味で口縁部がやや内湾するものを含む。5から13は、1から4に比べ器壁が厚く、外傾する傾向がみられる。坏の底部は少数の例外を除き、わずかに括れがみられ、厚く仕上げてあるものが多い。灰釉陶器碗の見込みに「神」の墨書が認められた(32)。口縁部には赤褐色のタール状の物質が付着している。供膳形態の土器は総じて破損の度合いが低く、完形、半完形品が多い。鉄器は刀子の茎1点が出土した(33)。

遺構の時期 出土遺物の主体となる土師器坏の特徴から、阿弥陀堂平安時代第IV期であると考えられる。なお平安時代住居址の時期区分については、第I次調査時の守矢昌文氏による編年案に従った(守矢 1983)。



第10図 第1a号住居址出土遺物 (1/4, 33 1/2)

第1表 第1a号住居址出土土器観察表

番号	種類	器種	残存	口径	底径	器高	器形の特徴	調整	口 ク ロ	色調	焼成	胎土	備考
1	土師器	坏	片	11.4	5.3	4	口縁部外反。	回転糸切り。	右	黄褐色	普通	石英、長石、赤色粒子、微細な雲母を多。	底面にスノコ状圧痕。
2	土師器	坏	片	10.8	4.2	4.2	底部括れ。体部下内湾、口縁部やや外反。	回転糸切り。	右	橙褐色	良好	石英、長石、微細な雲母を多、赤色粒子を少。	
3	土師器	坏	片	11.2	4.4	4.2	底部括れ。体部内湾、口縁やや外反。	回転糸切りの後、手持らナデ。	右	橙褐色	良好	長石、石英、微細な雲母を多。	
4	土師器	坏	口縁片、底部片	11.1	4.6	4.7	底部括れ。体部内湾、口縁やや外反。底部に指押しの痕跡。	回転糸切り。	右	黄褐色	良好	長石、微細な雲母、赤色粒子を少。胎土粉状、軟質。	底面にスノコ状圧痕。
5	土師器	坏	片	10.8	4.7	3.4	底部括れ。体部内湾、口縁外反。	回転糸切り。	右	黄褐色	良好	石英、微細な雲母を少。胎土粉状、軟質。	
6	土師器	坏	片	10.4	4.5	3.6	底部括れ。体部内湾、口縁外反。	静止糸切り。	右	橙褐色	良好	微細な雲母を多、石英を少。	底面にスノコ状圧痕。
7	土師器	坏	片	9.6	4.9	3.2	底部括れ。体部内湾。	回転糸切り。	右	橙褐色	良好	長石、石英、微細な雲母を多、赤色粒子を少。	
8	土師器	坏	片	10.2	4.6	3.5	底部括れ。体部内湾、口縁やや外反。	静止糸切り。	右	橙褐色	普通	石英、長石、微細な雲母を多、赤色粒子を少。	
9	土師器	坏	片	13.1	5.1	4.1	底部括れ。体部内湾、口縁やや外反。	回転糸切り。	右	赤褐色	良好	赤色粒子を多、白色粒子、微細な雲母を稀。	底面にスノコ状圧痕。
10	土師器	坏	片	10.2	5.2	3.1	底部から口縁やや外反。底部に指頭による圧痕。体部に手持ち調整痕。	回転糸切り。	右	赤褐色	良好	長石、石英、微細な雲母を多。	底面にスノコ状圧痕。
11	土師器	坏	片	12	5.7	3.6	底部から口縁やや内湾。	回転糸切りの後ナデ。	右	黄褐色	良好	石英、長石を多。胎土粉状、軟質。	
12	土師器	坏	口縁片、底部片	11.8	5.2	4	底部括れ。体部内湾、口縁外反。やや厚手。	回転糸切り。	右	赤褐色	普通	長石、石英、微細な雲母を多。	底面にスノコ状圧痕。
13	土師器	坏	口縁片、底部片	11.2	5.3	3.7	口縁体部内湾。内底面1段おちる。	回転糸切り。	右	赤褐色	普通	石英、長石、微細な雲母を多。	底面にスノコ状圧痕。
14	土師器	坏	底部片		5.6		底括れ。体部内湾。	回転糸切りの後ナデ。	右	黄褐色	良好	石英、長石を多。微細な雲母を少。	底面にスノコ状圧痕。
15	土師器	坏	底部片		5.1		体部内湾。内底面1段おちる。	回転糸切りの後ナデ。	右	黄褐色	普通	長石、石英、微細な雲母を多。胎土粉状、軟質。	
16	土師器	坏	底部片		4.8		体部内湾。内底面1段おちる。	回転糸切りの後ナデ。	右	赤褐色	良好	石英、長石、微細な雲母を多。	
17	土師器	坏	底部片		5.2		体部内湾。内底面1段おちる。	回転糸切り。	右	橙褐色	良好	長石、石英、雲母を多、赤色粒子を稀。	
18	土師器	坏	底部片		6.4		体部内湾。	底面ナデ。		暗褐色	良好	石英、長石、微細な雲母を多。	
19	土師器	坏	底部片		4.2		底部括れ。	回転糸切り。		暗褐色	良好	石英、長石を少。	
20	土師器	坏	底部片		4.1		体部内湾。	回転糸切りの後ナデ。底部に指頭による圧痕。	右	白黄褐色	普通	長石、石英、雲母を多。胎土粉状、軟質。	
21	黒色土器	高台付坏	底部片、高台片				高台ハの字状。	底面回転糸切りの後ナデ。内面磨き。		黄褐色	良好	赤色粒子を多、長石、石英、雲母を少。	内面にアバタ状の剥落。
22	土師器	高台付坏または皿	底部片		7.1		高台ハの字状。	底面回転糸切りの後ナデ。		白黄褐色	良好	雲母、白色礫粒、赤色粒子を少。胎土粉状、軟質。	
23	土師器	高台付坏	片	14.1	7.9	6.7	高台ハの字状。体部端に貼付高台。厚手。体部内湾、口縁を引出す。	底面ナデ。	右	橙褐色	良好	石英、長石、赤色粒子を少。	
24	土師器	高台付坏	口縁片、底部片	12.6	7.3	6.4	高台ハの字状。貼付高台。体部内湾。	底面ナデ。	右	赤褐色	普通	石英、長石、微細な雲母を多。	
25	土師器	高台付坏	底部片		6.8		高台ハの字状。体部端に貼付高台。体部内湾。	回転糸切りの後ナデ。		橙褐色	普通	微細な雲母を少、長石、赤色礫粒を稀。胎土粉状、軟質。	
26	土師器	高台付皿	口縁片	16.8	8.2	5.5	低い高台。体部底面に貼付高台。口縁の歪みは図示した1カ所のみ。	回転糸切りの後ナデ。		黄褐色	普通	赤色粒子を少。胎土粉状、軟質。	内面に煤附着、灯明か？
27	土師器	高台付皿	片	12.5	7.6	4.6	高台ハの字状。体部端に貼付高台。	底面クロコナデ。	左	橙褐色	良好	赤色粒子を多、石英、長石を少、雲母を稀。胎土粉状、軟質。	
28	灰釉陶器	壺	底部片		8.6		体部端に貼付高台。	底面回転糸切りの後高台内面周縁をナデ。		鈍い白灰色	普通	白色粒子を少。	釉は緑がかった白色で不透明。つけかけ。
29	灰釉陶器	皿	片	14.3	6.8	2.8		底面ナデ。		緑がかった白灰色	良好	白色粒子を稀。	釉は白緑色透明。つけかけ。
30	灰釉陶器	皿	底部片		6.2		体部端に貼付高台。	底面回転糸切りの後高台内面周縁をナデ。		白灰色	良好	白色粒子を少。	
31	緑釉陶器	皿	片	14.3	6.8	2.8				青灰色	良好		
32	灰釉陶器	壺	片	13.2	6.8	3.6	体部端に貼付高台。	底面回転糸切りの後高台内面周縁をナデ。	右	鈍い白灰色	普通	石英を少。	釉は白色不透明。口縁内外面に暗赤褐色タール状の物質が附着。つけかけ。

第1b号住居址（第11図、図版2-1）

検出状況 第1a号住居址調査中に検出された住居址である。周溝が第1a号住居址床面下より検出されたことから、第1a号住居址以前の住居址である。第1号掘立柱建物址P₃と重複し、本住居址が新しい。

遺構の構造 第1a号住居址にほとんど破壊されていた。周溝により把握した平面形は隅丸方形で、主軸方向はN56°E、主軸長さ3m72cm、幅は3m12cmである。周溝から床面積を求めると8.9m²となる。

カマドの痕跡は住居址北東隅から検出された。覆土中に焼土、灰、粘土粒子を含むが、火床は検出できなかった。床面は確認できなかったことから、第1a住居址と同じか、より高い位置に設けられていたと考えられる。周溝は浅く、北西の壁際では検出できなかった。P₈、P₉は想定される住居址西壁との位置関係から、本住居址に伴う床下土坑、灰捨て穴であると思われる。P₈は第1号掘立柱建物址P₃を壊して掘り込まれたものと考えられる。

遺物の出土状況 本住居址の出土遺物と確定できるものはなかった。

遺構の時期 本住居址の時期は、第1a号住居址との新旧関係から阿弥陀堂第IV期以前である。

第2号住居址 (第11・12図、図版2-4、3-1、4-3・4)

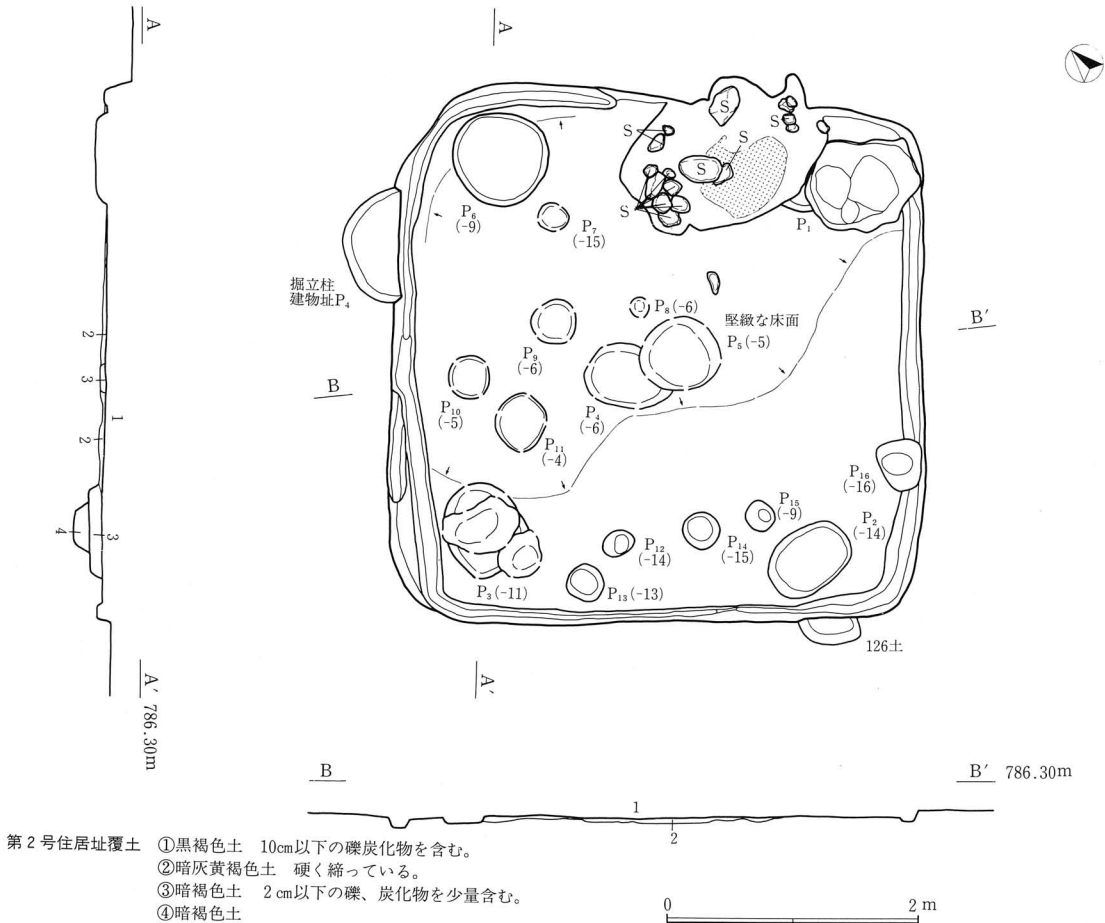
検出状況 確認面は暗黄褐色土である。第1a号住居址南西から検出され、第1号掘立柱建物址P₄と重複する。
遺構の構造 平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向はN56°Eである。主軸の長さは4 m35cm、幅は4 m20cm、残存壁高は23cmを測る。床面積は15.2m²である。

カマドは南東隅に設けられていた。構築土に粘土がみられたこと、袖石に用いたと思われる赤化した礫が検出されたことから、石組粘土カマドであったと考えられる。奥壁は住居址壁面をわずかに掘り込んでおり煙道の痕跡が認められた。煙道は短いものであったと考えられる。焚き口左手には長径20cmほどの円礫と鉄平石が敷かれていた。カマドの右側から灰捨て穴が検出された。

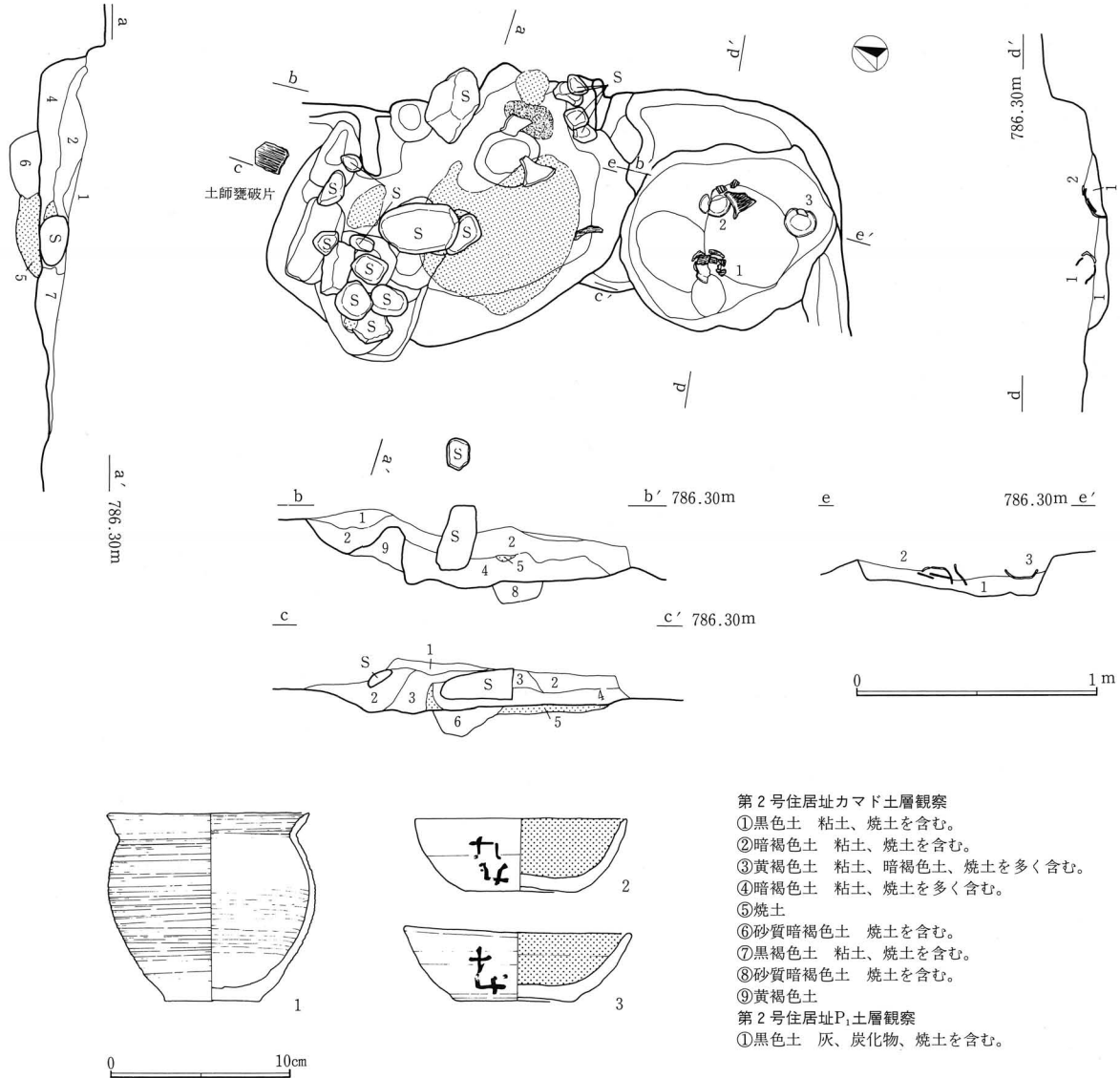
カマド焚き口から住居址中央、住居址北隅にわたる範囲の床面は堅緻であったが、壁際では軟弱であった。北壁および南壁下の床面は、砂質土に掘り込んでおり礫が露出していた。周溝は全周するが住居址南壁付近で不明瞭であった。柱穴は多数検出されたが、主柱穴は不明である。P₇、P₈の上面には貼床が観察されたが、P₂、P₃、P₄、P₅、P₆には貼床はみられなかった。P₅からP₇の覆土は黒褐色土で、焼土粒子と5 mm以下の炭化物、ロームブロックが少量含まれていた。礫は小礫のみであった。

遺物出土状況 遺物の出土量は少ない。大部分はカマドとその周辺から出土している。カマド右脇の灰捨て穴上面から土師器甕破片、完形の小型甕、墨書された土師器坏2点が出土した(第12図)。灰は遺物直下から検出された。他にカマド火床直上から土師器甕の破片が出土している。

出土遺物 土師器甕破片、小型甕(1)、坏破片、黒色土器には坏2点がある(2、3)。黒色土器坏の外表面部に



墨書がみられるが判読できない（図版4-3・4）。墨書はよく似た文字であると考えられる。他に器壁が薄く口縁断面が方形をなし、頸部から胴部にかけてカキ目調整が著しい土師器甕破片と土師器坏破片がある。遺構の時期 灰捨て穴上面の土師器から、阿弥陀堂平安時代第II期と考えられる。



- 第2号住居址カマド土層観察
 ①黒色土 粘土、焼土を含む。
 ②暗褐色土 粘土、焼土を含む。
 ③黄褐色土 粘土、暗褐色土、焼土を多く含む。
 ④暗褐色土 粘土、焼土を多く含む。
 ⑤焼土
 ⑥砂質暗褐色土 焼土を含む。
 ⑦黒褐色土 粘土、焼土を含む。
 ⑧砂質暗褐色土 焼土を含む。
 ⑨黄褐色土
 第2号住居址P₁土層観察
 ①黒色土 灰、炭化物、焼土を含む。

第12図 第2号住居址カマドと出土遺物 (1/30、1～3 1/4)

第2表 第2号、3号住居址出土土器観察表

番号	種類	器種	残存	口径	底径	器高	器形の特徴	調整	ロクロ	色調	焼成	胎土	備考
2住1	土師器	小型甕	1/2	13.3	5.2	10.4	最大径は胴部、13.6cm。	ロクロカキ目。口縁外面と底部ナデ。底面回転糸切りの後ナデ。	右	赤褐色	良好	石英、長石、雲母、青灰色礫粒を多。	内面下半に炭化物付着。
2住2	黒色土器	坏	1/2	11.8	6.4	4	体部内湾、中央で屈曲。	回転糸切りの後外周をナデ。内底面に放射状磨き、口縁内面は横磨き。	右	黄赤褐色	普通	赤色粒子を少。	体部に墨書、判読不能。
2住3	黒色土器	坏	1/2	12.7	6.6	3.8	体部内湾、中央でわずかに屈曲。	回転糸切りの後ナデ。石英、長石、雲母を多、赤色粒子を少。	右	黄褐色	普通	長石、石英、雲母を多、赤色粒子を少。	体部に墨書、判読不能。2と似た墨書。底面にスノコ状圧痕。
3住1	土師器	甕	1/2	32			口縁断面方形。	カキ目。		赤褐色	良好	石英、長石、雲母を多。	竈火床から出土。
3住2	黒色土器	坏	1/2	14.4	6.2	3.9	体部から口縁内湾。体部下半でわずかに屈曲。	回転糸切りの後、ナデ。		白黄褐色	普通	微細な石英、長石、雲母、白色粒子、赤色粒子を少。	底面にスノコ状圧痕。竈火床出土。
3住3	土師器	坏	底部1/2		4.9			回転糸切り。		白黄褐色	良好	微細な白色粒子、雲母を少。	

第3号住居址 (第13図)

検出状況 第4号住居址、第7号住居址と第1号掘立柱建物址および縄文時代の第8号住居址と重複関係にある。第7号住居址と第1号掘立柱建物址は本住居址より新しいが、第4号住居址との新旧関係は不明である。確認面は暗褐色土層下部で、覆土は1層である。

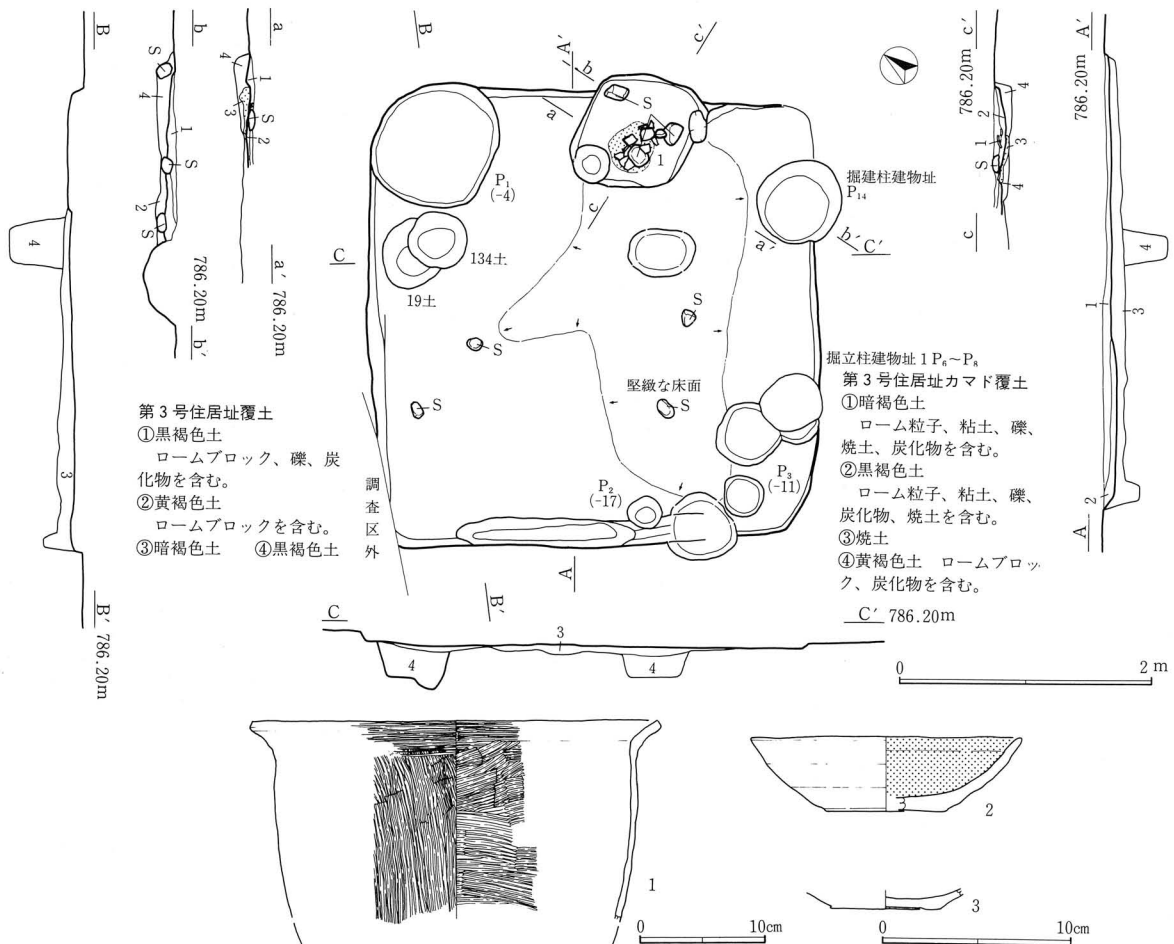
遺構の構造 平面形は隅丸方形を呈し主軸方向はN56°Eを向く。主軸の長さは3m63cm、幅は3m59cm、残存壁高は14cmである。床面積は11.1m²を測る。壁の立上がりは明瞭であった。

カマドは住居址北東隅に設けられていたが、重機による表土剥ぎの際破壊したこともあり、痕跡しか確認できなかった。カマド構築土から長さ20cmの礫が2個検出され、火床をはさむ位置にピットが検出されたことから石組粘土カマドであったと推定される。カマド奥壁は住居址の壁を50cmほど奥へ掘り込んで造られている。煙道は検出できなかった。カマド焚き口から住居址南半の床面は堅緻で、南隅と北半の床面は軟弱であった。周溝は南西壁下にもみ検出された。主柱穴は不明である。P₁の覆土には灰と焼土粒子、炭化物粒子が含まれていた。貼床下から検出されたのはP₃である。

遺物出土状況 出土遺物は少ない。覆土からは土師器坏破片、黒色土器坏破片、須恵器甕破片が散漫に出土した。カマド火床上面から土師器甕破片、土師器坏破片が混在して出土した。

出土遺物 口縁断面が方形をなす土師器甕(1)、黒色土器坏(2)、坏(3)がある。破片を含め土師器坏と黒色土器坏はほぼ同じ出土量である。他に須恵器蓋破片が出土している。

遺構の時期 カマド火床と覆土出土の土師器から、阿弥陀堂平安時代第II期からIII期であると考えられる。



第13図 第3号住居址と出土遺物 (1/60、1 1/6、2・3 1/4)

第4号住居址 (第14図、図版3-2)

検出状況 第3号住居址、第2号掘立柱建物址と重複し、第2号掘立柱建物址P₂₋₄、P₇₋₈はカマド上面の観察で確認できなかったことから、第4号住居址の方が新しいと考えられる。確認面は暗褐色土下部である。

遺構の構造 平面形は隅丸方形であるが、やや歪んでいる。主軸方向はN25°Eを向く。主軸の長さは3m62cm、幅は3m52cm、残存壁高は19cmである。床面積は10.3㎡を測る。壁の立上りは明瞭である。

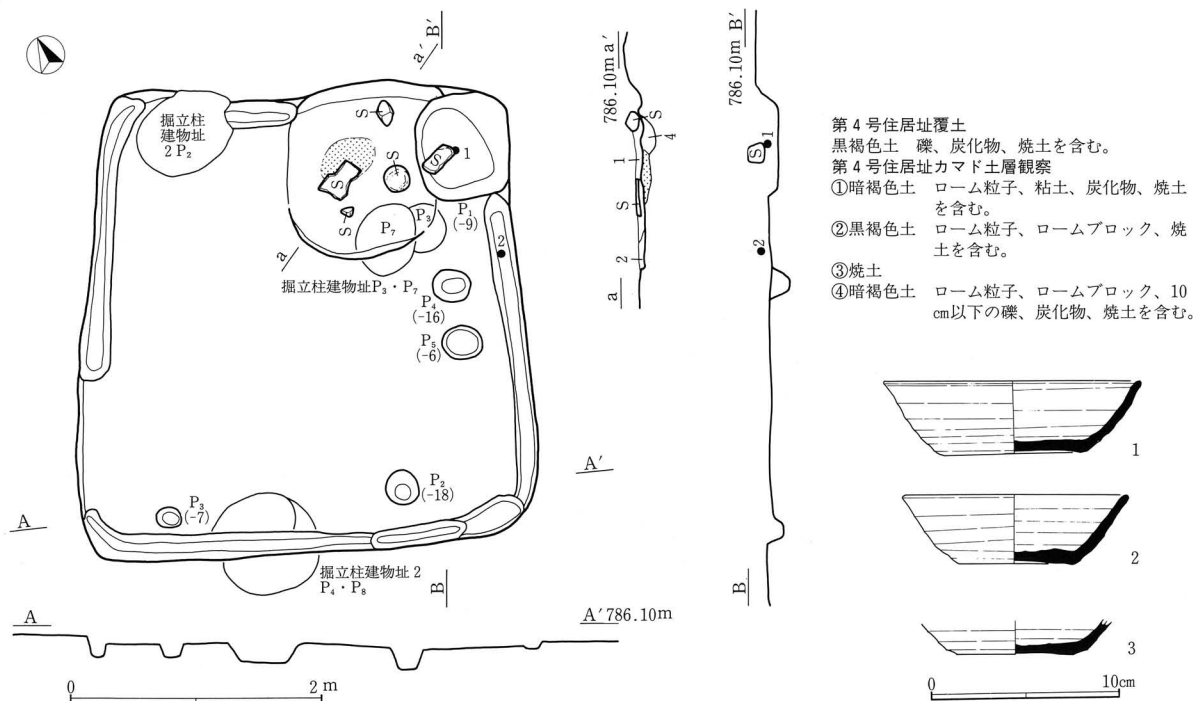
カマドは北東隅に設けられていた。痕跡しか確認できなかったが、赤化した礫がカマド内から出土したことから、石組粘土カマドであると考えられる。奥壁は、壁をわずかに掘り込んで造られている。右脇のP₁の覆土は黒色土で、焼土と5mm以下の炭化物を含み、灰捨て穴であると思われる。

床面はカマド焚き口前面から住居址東半にかけて堅緻であり、カマド左脇から住居址西半が軟弱であった。周溝はほぼ全周するが、西壁下で部分的に切れている。住居址南壁下に一際深い周溝がある。P₂、P₃は壁際に位置し、住居址の柱穴であると考えられたが、棟方向に対応する柱穴が検出できなかったことから、主柱穴の有無は不明としておきたい。

遺物出土状況 遺物は少なく、覆土から散漫に出土した。カマド右脇の礫下(第14図1)、カマド右手の覆土(2)から須恵器環が2点出土している。覆土から出土した須恵器環は横位で出土している。

出土遺物 土師器では甕破片、坏破片がある。須恵器は甕破片、須恵器環3点(1、2、3)と坏小破片が出土している。供膳形態は須恵器環が主体である。

遺構の時期 覆土出土の土器から、阿弥陀堂平安時代第I期であると考えられる。



第14図 第4号住居址と出土遺物 (1/60、1~3 1/4)

第3表 第4号住居址出土土器観察表

番号	種類	器種	残存	口径	底径	器高	器形の特徴	調整	ロクロ	色調	焼成	胎土	備考
1	須恵器	環	⅔	13.9	7.5	3.9	体部下半内湾。	回転糸切りの後、手持ちナデ。	右	淡い青灰色	良好	長石、雲母を少。	火だすきが観察される。
2	須恵器	環	⅓	12.2	6.1	3.7	体部下半内湾、口縁やや外反。	回転糸切り。	左	暗灰色	良好	長石を少。	内外面に火だすきが観察される。
3	須恵器	環	⅓		3.3			回転糸切り。体部下半へ削り。	左	青灰色	良好	長石、赤色粒子、白色粒子を少。	底面にスノコ状圧痕。

第7号住居址 (第15図)

検出状況 第3号住居址と重複し、第3号住居址より新しい。本住居址の床面は第3号住居址の覆土内に設けられていた。またカマド袖下部から第132号土坑が検出された。確認面は暗褐色土層上部である。確認できたのはカマド袖および燃焼部と床面の一部のみである。

遺構の構造 平面形は不明である。一部遺存していた床面との位置関係から、住居址南西側にカマドが構築されていたものと思われる。カマドは構築土が一部遺存していたことから、袖部が確認できた。カマド焚き口前面右側から灰がつまった土坑が検出された。床面が確認できたのはカマド前面から右手にかけてであり、極めて堅緻であった。壁、周溝は検出できなかった。

遺物出土状況 カマド火床直上から須恵器甕、土師器甕、土師器小型甕の破片(1)が出土した。このほかカマド構築土から土師器が出土している。

出土遺物 口縁部断面が方形となる土師器甕破片、小型甕(1)、坏破片の他、須恵器坏、甕破片が出土した。

遺構の時期 本住居址の時期は不明である。

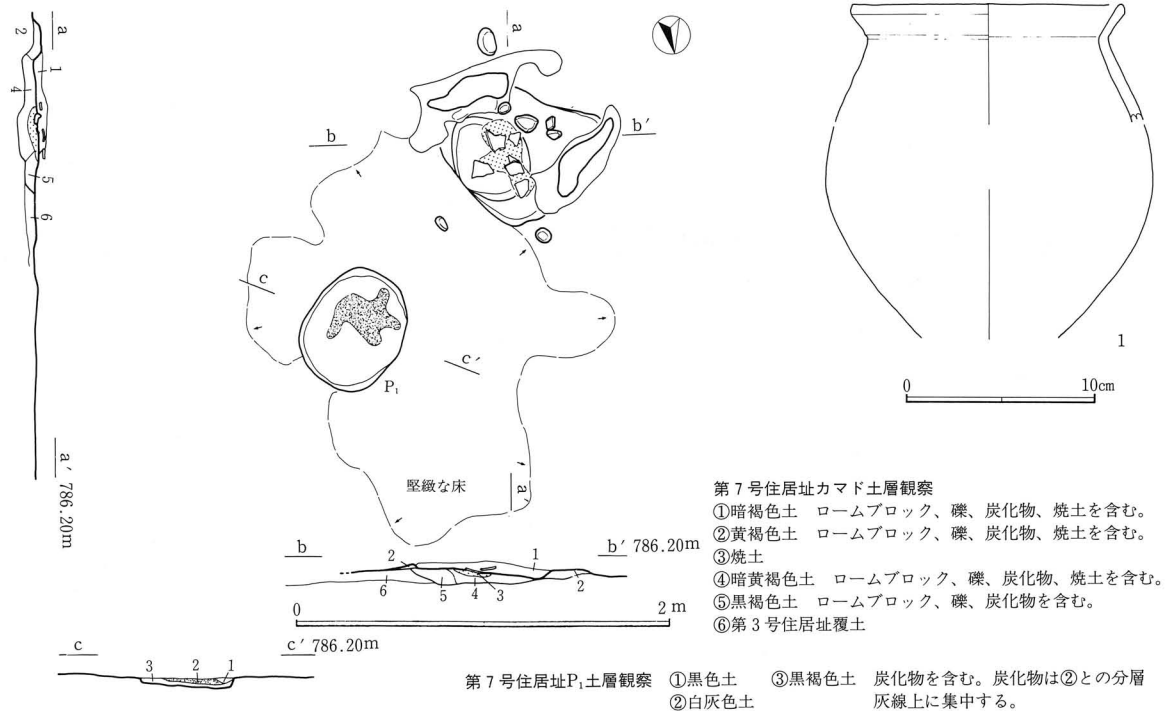
第9号住居址 (第16図)

検出状況 調査区西側遺構検出作業中に、調査区西側隅の断面に焼土が観察された。精査したところ、カマド断面であると考えられた。黒色土中に構築され、床面は検出されなかった。カマドの下は礫層となる。

遺構の構造 カマド以外の施設については不明である。

遺物出土状況 出土遺物はない。

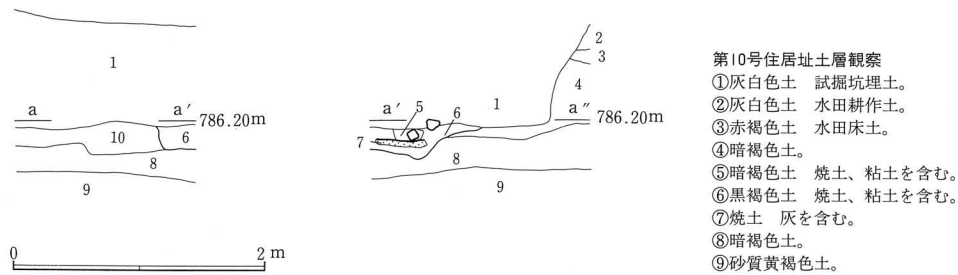
遺構の時期 本住居址の時期は不明である。



第15図 第7号住居址と出土遺物 (1/40、1 1/4)

第4表 第7号住居址出土土器観察表

番号	種類	器種	残存	口径	底径	器高	器形の特徴	調整	ロクロ	色調	焼成	胎土	備考
1	土師器	小型甕	1/6	14.4				外面体部、内面体部から口縁ロクロ刷毛目の後ロクロナデ。	右	白黄色	良好	石英を多。胎土粉状、軟質。	



第16図 第10号住居址土層断面図 (1/60)

(2) 掘立柱建物址

柱穴のみからなる遺構の確認は、現場作業中も確認に努めたが、列状の配置を確認するにとどまった。全ての掘立柱建物址が整理作業中に図面上で確認したものである。

第1号掘立柱建物址 (第17図)

検出状況 整理作業中に配置が確認された。ほとんどの柱穴の確認面は暗黄褐色土下部である。第1a号住居址と第1b号住居址、第3号住居址と重複する。P₂とP₃の上面に貼床が設けられていたことにより、第1号掘立柱建物址は第1a号住居址より古い時期に、また第3号住居址の床面下よりP₁₄とP₇が検出されたことから第3号住居址より古い時期の建物址であると考えられる。2本の柱穴が確認できなかったが、柱穴の配置から掘立柱建物址と認定した。

遺構の構造 平面形状は長方形で、柱間寸法は短辺で約1 m80cm、長辺約3 m60cmを測る。主軸方向はN60°Eを向く。柱穴は遺跡内から検出された柱穴状の土坑より規模が大きい。P₄、P₁₁、P₁₂では柱痕と考えられる土層が観察できたが、他の大部分の柱穴については柱痕が検出できなかった。

本址の認定には注意を要する。柱間の距離が通常の掘立柱建物址のほぼ2倍ある点と、P₁₃とP₁₄の存在から、主軸線と同じくするよう計画的に配置された2棟の2間2間の側柱掘立柱建物址であるとも考えることもできる。反面、2棟であると考えた場合、第2号掘立柱建物址との関係で、隣接する建物址であるにもかかわらず主軸線にずれが生じることが理解しにくい。また2棟と考えた場合、P₁₃に相対する位置にある第3号掘立柱建物址P₂を吸収しなければ成立たなくなる。以上のことから、第1号掘立柱建物址は2棟に分離する可能性を残すが、ここでは1棟の2間3間の総柱掘立柱建物址として考えておきたい。今後周辺域の調査が行われた場合、掘立柱建物址の主軸方向と規模から、本址の再検討を行なう必要も生ずることと思われる。

遺物出土状況 柱穴からは、縄文時代、弥生時代、平安時代の遺物が出土したが、確実に本址に伴うと考えられる遺物はなかった。

遺構の時期 第1a号、第1b号、第3号住居址との重複関係から、阿弥陀堂平安時代第III期以前であると考えられる。

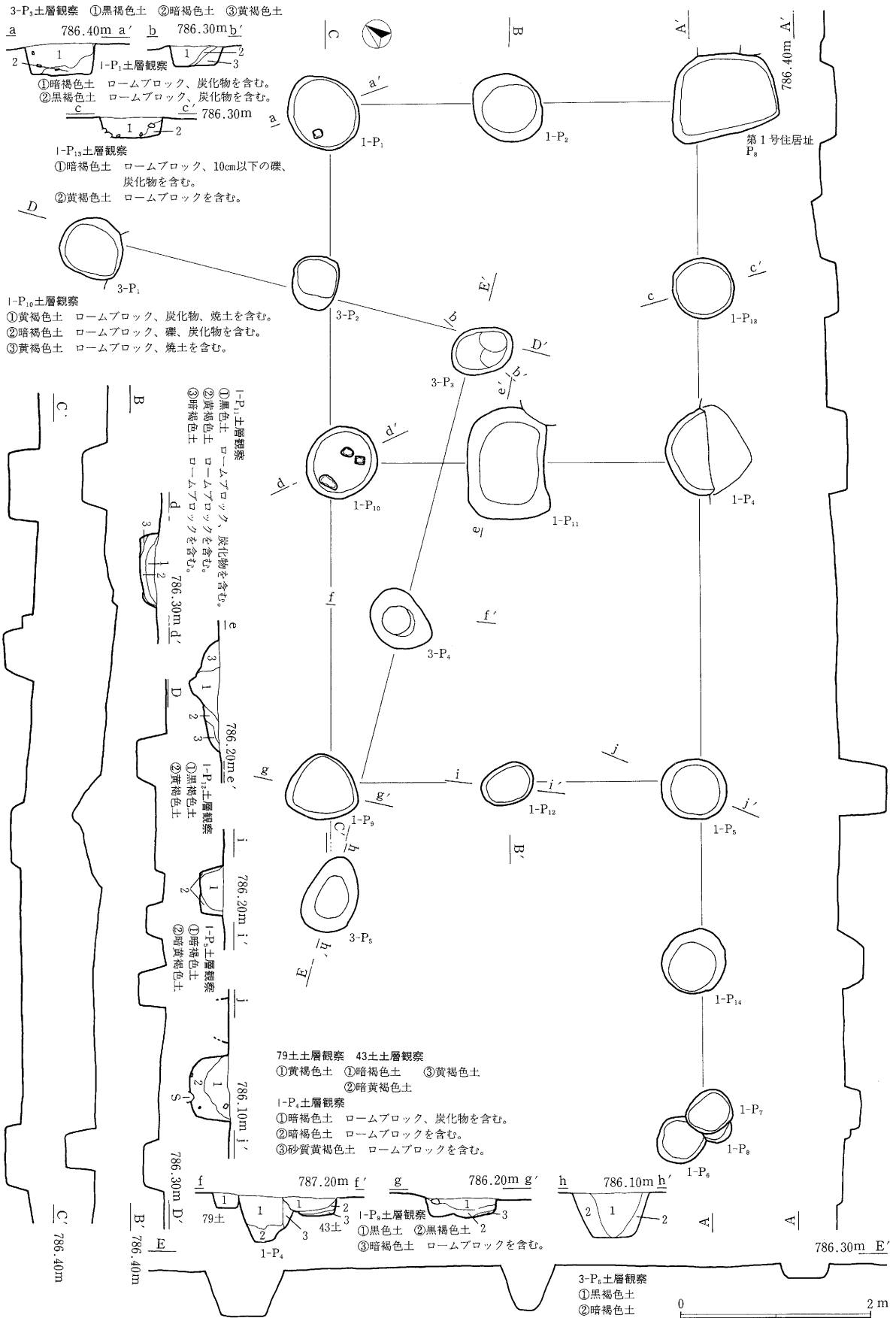
第3号掘立柱建物址 (第17図)

検出状況 確認面は暗黄褐色土層下部である。

遺構の構造 柱間数は調査区内では、2間2間が確認できた。平面形は東西に長い長方形で、柱間寸法は、短辺で約2.1m、長辺で約3mを測る。第2号掘立柱建物址に比べ、柱間の距離が大きい。主軸方向はN75°Eを向く。P₅では柱痕らしき土層が観察されたが、他の柱穴では柱痕は観察できなかった。

遺物出土状況 柱穴から縄文時代、平安時代の遺物が出土しているが、本址に伴うと考えられる遺物はない。

遺構の時期 重複関係、出土遺物がなく、時期は不明である。



第17図 第1号、3号掘立柱建物址 (1/60)

第2号掘立柱建物址（第18図）

検出状況 柱穴の確認面は暗黄褐色土層である。第4号住居址と重複していた。P₃、P₇がカマド及び貼床の下から検出されたことから、第4号住居址より古い時期に建てられたものであると考えられる。

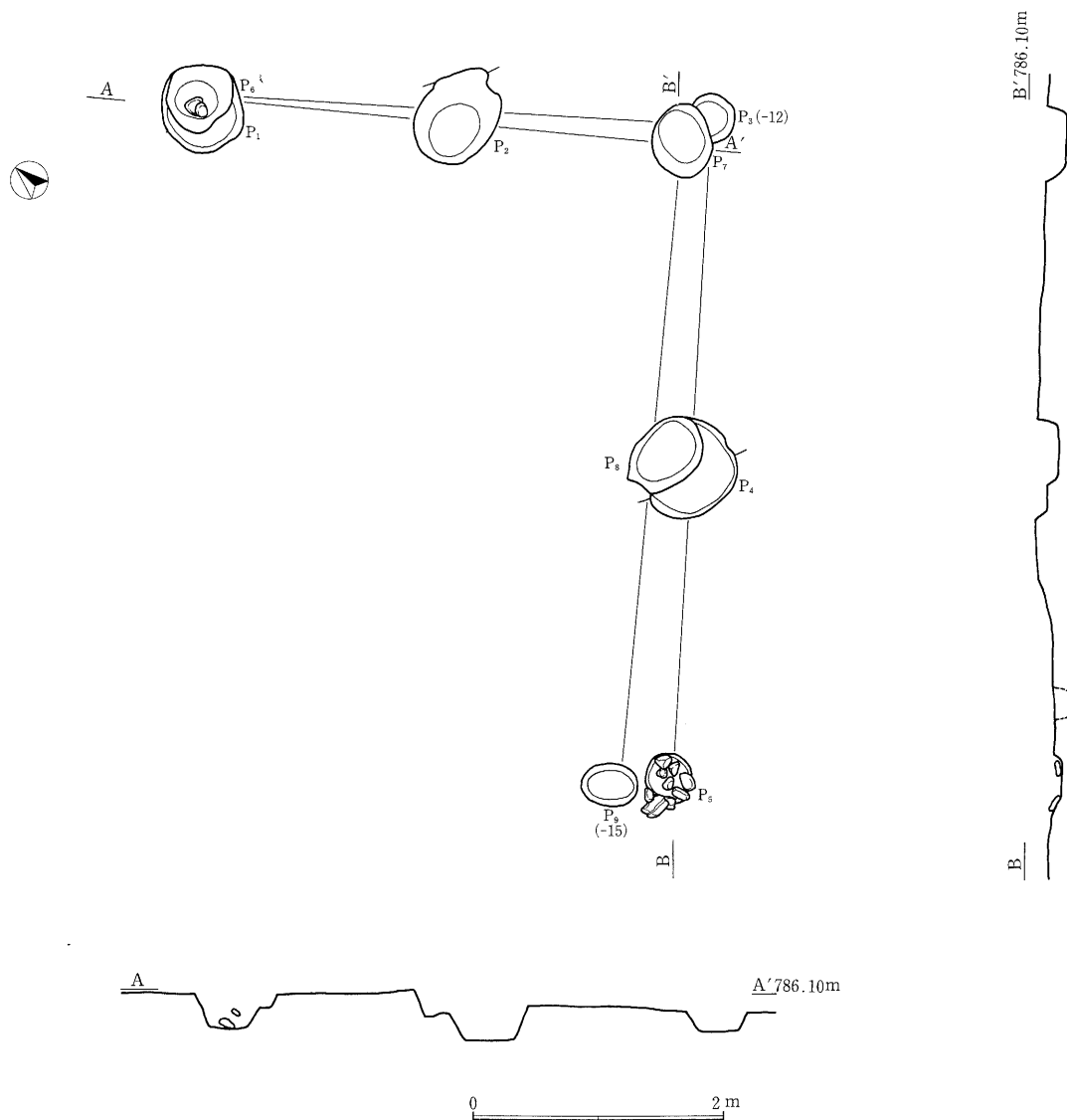
遺構の構造 柱間数が2間2間の建物址である。平面形状はほぼ方形で、柱間寸法は南北方向で約2m、東西で約2m60cmを測る。主軸方向はほぼN47°Eを向く。P₁とP₆、P₃とP₇、P₄とP₈に柱穴の重複が認められることから、主軸線をわずかに変更して立て替えられたものと思われる。柱穴間の切り合いは不明である。P₅底面からは礫が出土している。礫は坑底の中心に向かって傾斜している。

遺物出土状況 柱穴から弥生時代の遺物が出土したが、確実に本址に伴うと考えられる遺物はない。

遺構の時期 第4号住居址との重複関係から阿弥陀堂平安時代第I期以前である。

(3) 遺構外出土遺物

遺構外からも多くの遺物が出土したが、時期が判明するものや図示できる遺物はない。土師器破片が最も多く、灰釉陶器、須恵器破片がある。



第18図 第2号掘立柱建物址 (1/60)

第4節 時期不明の遺構

(1) 掘り込み (第21図、図版1-1)

検出状況 第6号住居址調査中に立上りの一部が検出されたため、周囲を精査したところ、直交する2面の立上りが確認された。確認面は暗黄褐色土層下部である。

遺構の構造 把握できたのは壁面と壁面直下の周溝状の掘り込みである。残存壁高は16cmで立上りは明瞭である。周溝状の掘りこみは住居址周溝に比べ乱れが激しく、部分的に跡切れている。住居址に伴う施設は検出できなかったことから、第I次調査溝1に類似する遺構である可能性が残される。覆土内には礫が多く含まれていたが、分布形状が落ち込みの平面形とは一致しない。礫は第6号住居址東側から続くものであると考えられ、落ち込みに伴うとは考えられない。

遺物出土状況 出土遺物はない。

遺構の時期 出土遺物がなく、時期は不明である。

(2) 土坑 (第19・20・21図)

住居址と掘立柱建物址の柱穴を除き、総数81基の土坑が検出された。紙数が限られているため、平面図と深さを示すのみにとどめた。阿弥陀堂遺跡には多くの時代、時期の遺構が残され、平安時代の掘立柱建物址の柱穴から、縄文時代の土器のみが出土している例があることなどを考慮し、土坑の所属時期を出土遺物により決定することはせず、一括して報告する。

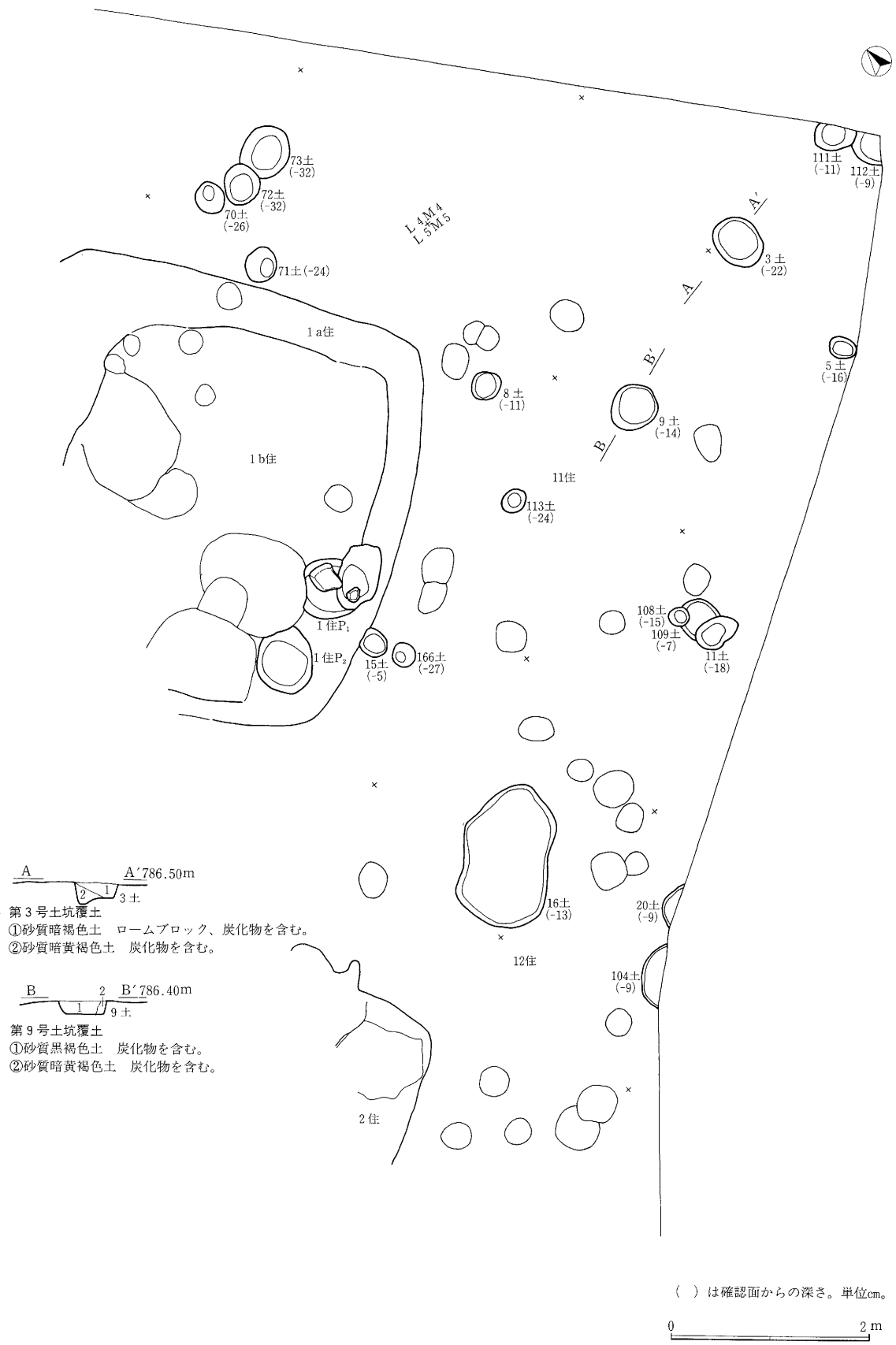
検出された土坑の中で中心となるのは、柱穴状の土坑である。柱穴と似た形状の土坑は群をなす傾向がみられ、縄文時代の第8号住居址のような柱穴のみが確認された住居址である可能性が高いと考えられる。今回の調査では、柱穴の配置が確認できなかったものについては土坑群として報告する。住居址の柱穴に似た形状の土坑は、2つの群をなす。H-3、I-4グリッドを中心に分布する土坑群と、C-10、D-10、E-12を中心に検出された一群である。個々の土坑の口径や深さは第8号住居址などの柱穴と変らない。H-3、I-4グリッドには第9号住居址があり、この住居址と重複する住居址の柱穴である可能性は高い。C-10からE-12グリッドの土坑群もその密度から、住居址の柱穴であったとすれば複数の住居址が重複したのものであると考えられる。

口径が大きい土坑は、平安時代の掘立柱建物址の柱穴に類似するものがあるが、掘立柱建物址として認定できる柱穴配置は確認できなかった。調査面積が狭いことから、今回の調査で検出された土坑が、掘立柱建物址の柱穴である可能性は十分にあり、今後の調査では注意が必要である。

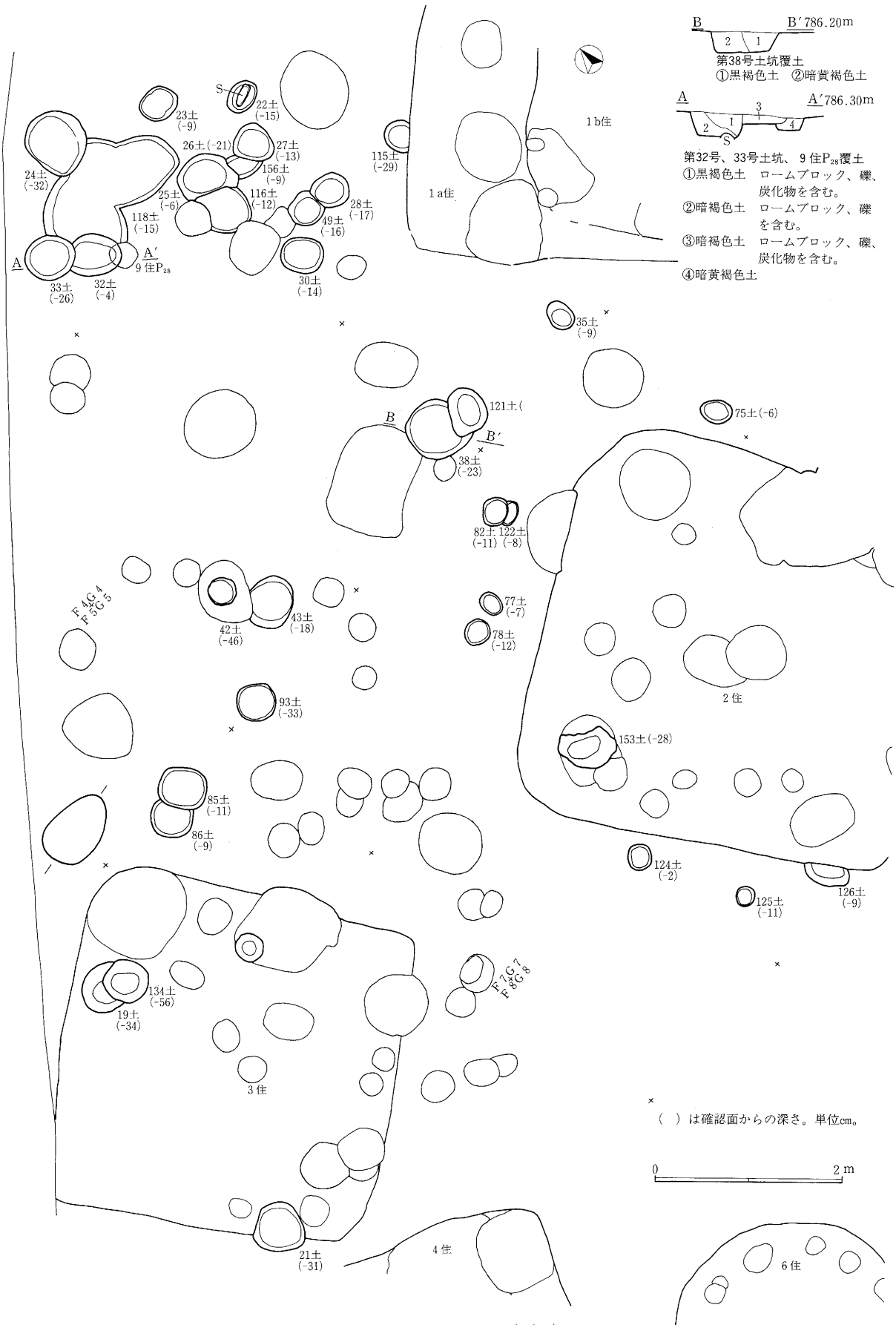
今回の調査では、貯蔵穴や墓穴に比定できる土坑が少ない。口径1mを超える土坑は第25号土坑と第118号土坑(第20図)にすぎない。いずれの土坑も楕円形で浅く、立上りは不明瞭であった。土坑の用途を類推できるような遺物の出土もなかった。

(3) 水田址 (第3図)

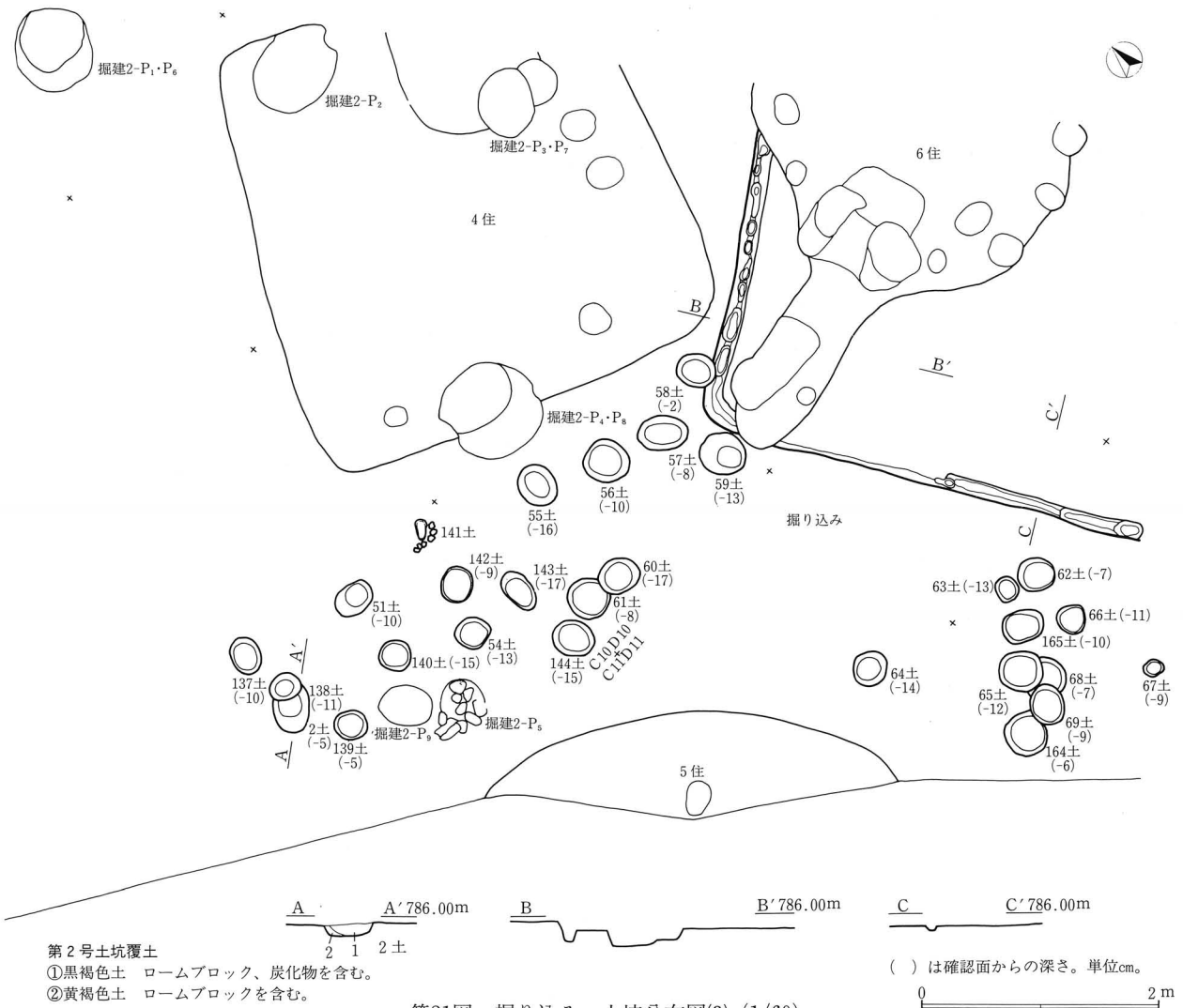
調査区北東壁の断面で観察したのみである。北東壁断面の北寄りに畦らしき土層が観察され(第3図⑥)、床土と考えられる鉄分が沈着した層が畦の左右に広がっていたことから、2枚の水田があったことが判明した。今回の調査地点は、第I次調査の時点では水田であったが、この水田の時間的な上限は不明である。『諏訪藩主手元絵図』(諏訪史談会 1985)によれば阿弥陀堂遺跡付近は田と記されている。



第19図 土坑分布図(1) (1/60)



第20図 土坑分布図(2) (1/60)



第IV章 結 語

(I) 縄文時代の遺物と遺構分布について

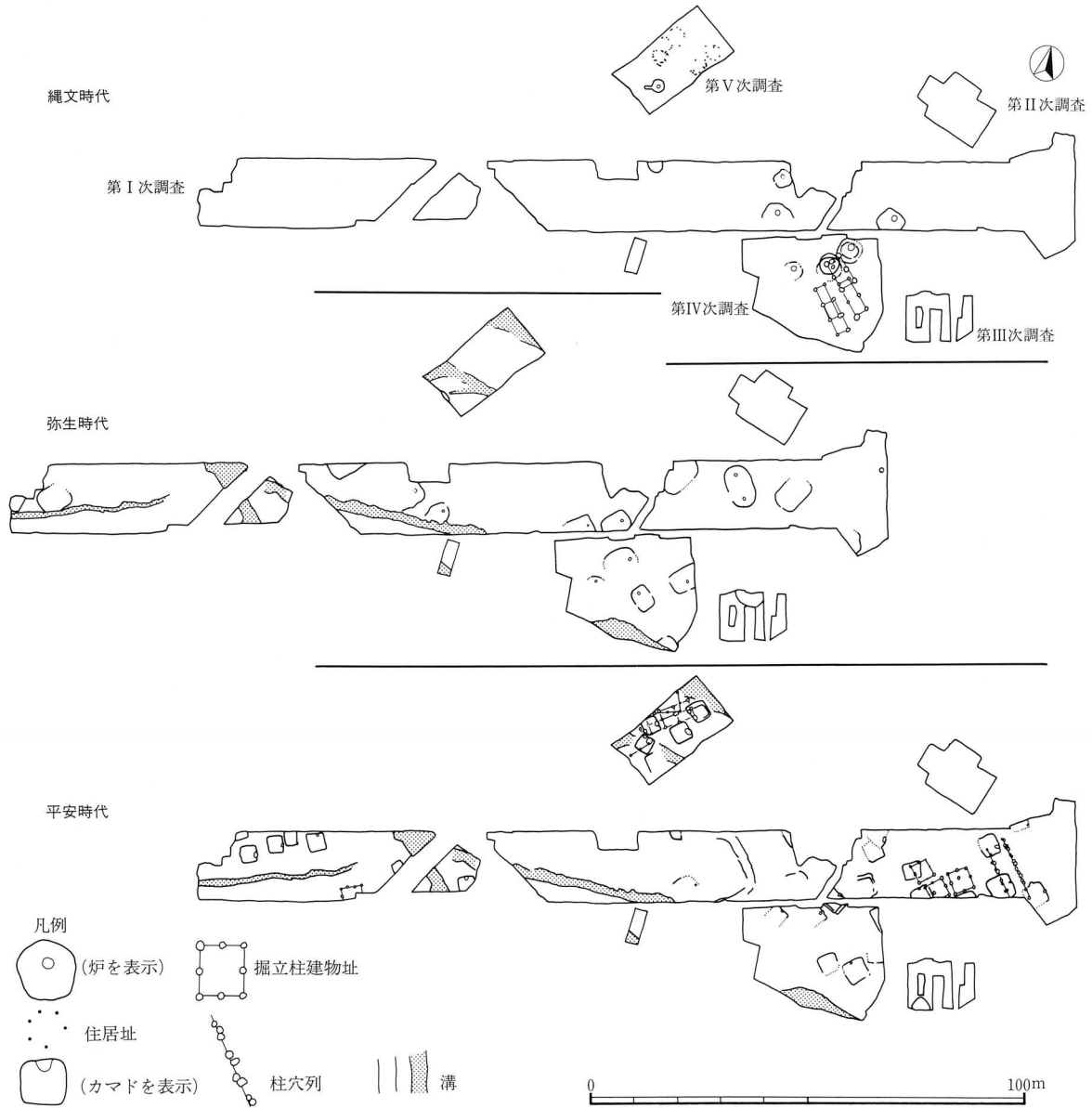
縄文時代住居址は5基検出された。この内時期が判明したのは第6号住居址である。第6号住居址出土土器のうち覆土出土の第4図9、10は、石井寛氏のいうC I群の範疇でとらえられ、炉址内出土の第4図1はC II群に該当する(石井 1993)。C I群は堀之内 I 式期に関東西部地域を中心に分布する、いわゆる下北原式の土器群組成を構成するものとされている。今回の調査では、石井氏のいうA群やB群は出土しなかったが、これが第6号住居址出土資料からの欠落であるか、本地域の有する地域的な特徴によるものであるのかは判断できない。第6号住居址出土資料は資料数は少ないながら、堀之内 I 式期の中部高地における土器様相を把握する上で、貴重な資料であると思われる。

阿弥陀堂遺跡においては第 I 次調査地点と第IV次調査地点で中期曾利 II 式期以降の住居址群からなる集落が確認されていたが、今次調査地点において中期最終末から後期の集落が初めて確認された(第22図)。阿弥陀堂遺跡中期後葉の集落は6本柱で大型の方形柱穴列を伴うことから相当規模の集落遺跡であると考えられ、中期後葉から後期にかけて居住域をかえながら集落が営まれていた可能性が強い。縄文時代後期には、高部

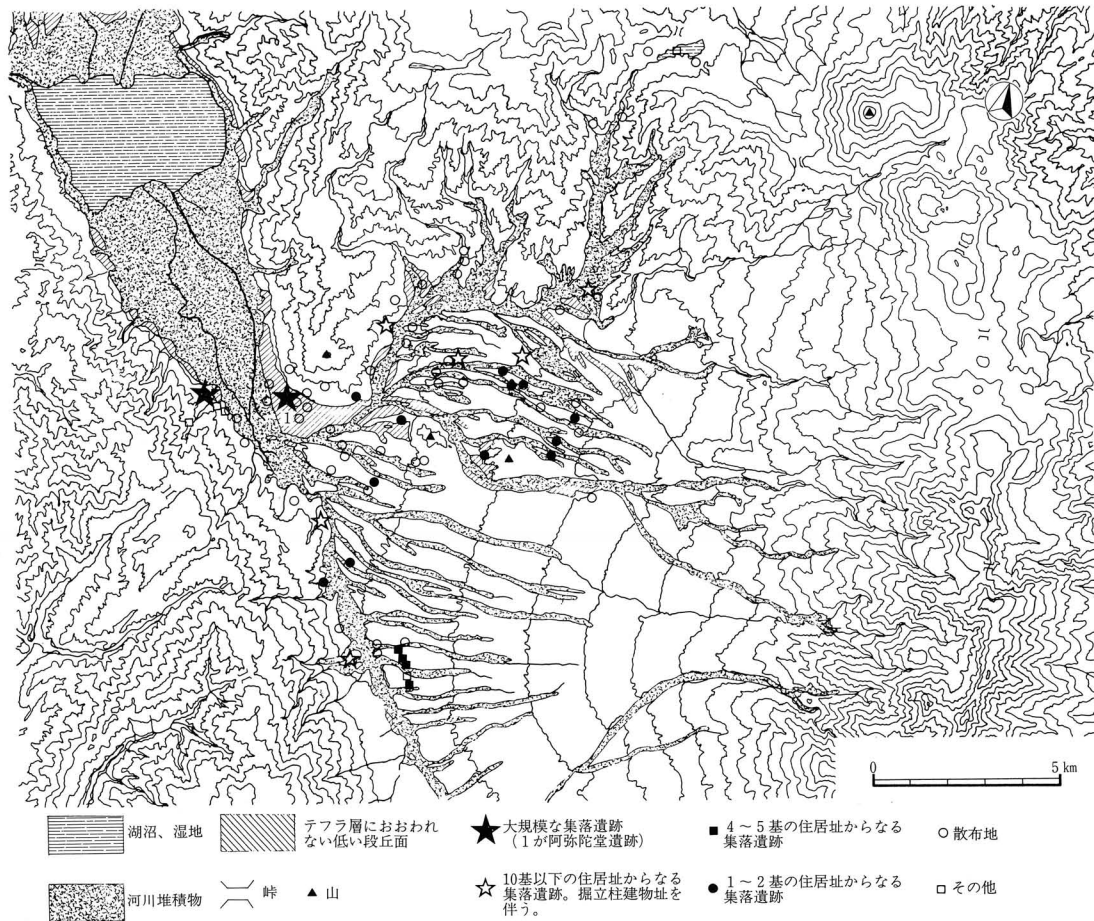
遺跡（茅野市教育委員会 1983）や小飼通遺跡（茅野市教育委員会 1986）、下ノ原遺跡（茅野市教育委員会 1980）など、沖積地や河川に近い低位段丘面に遺跡が形成される傾向がある。高部遺跡では群在する集団墓とみられる土坑墓群が検出されたことから（鶴飼 1983）、周辺には相当規模の集落が形成されていたと考えられる。立石遺跡で検出された、多数の柱穴を円形に配列する型の住居址が、阿弥陀堂遺跡で認められるとすれば、第6号住居址の存在もあわせ、諏訪湖東盆における中期末から後期の拠点集落址が存在している可能性がある。

(2) 平安時代第1号住居址について

第1a号住居址からは多量の遺物が出土した。土師器の多くは平安時代後期のうちでも末期の様相を示している。第1a号住居址出土遺物で主体を占めるのは、鋤柄俊夫氏が土師器坏Fとした坏である（第10図1～3、6、9）（鋤柄 1988）。他の種類の坏も同様であるが底部が厚くつくられており、底部の厚みを強調するようにわずかながら屈曲させている点が目される。坏の構成からみれば、鋤柄氏によるII-2期からII-3期の特徴を有する資料である。また器形の特徴や法量は、高部遺跡の資料を分析した鶴飼幸雄氏の分類における坏A、Bに類似



第22図 阿弥陀堂遺跡時代別遺構分布図 (1/1,600)



第23図 茅野市の平安時代遺跡の分布 (1/200,000)

する資料が多く含まれているが、疑似高台皿が出土資料から欠けている(鶴飼 1983)。坏底部の厚みが増す現象や第10図27の高台皿が、高部遺跡の疑似高台皿にいかにつながるか興味のあるところである。鋤柄俊夫氏の編年観に従えば、第1a号住居址の年代は疑似高台皿の欠落からみて11世紀前半であると思われる。

カマドの遺存状況と墨書灰釉陶器(32)は、カマド祭祀を想起させる。灰釉陶器碗はカマドに相對した人物が、「神」の文字を自らが読める位置に据え置いたかの様な状態で出土した。またカマド火床直上を中心に出土した土師器高台皿は、内面に煤が付着し、一部線状に観察される部分があることから、灯明に用いられた可能性がある。この土器はカマドに散乱した状態で出土した破片が接合したもので、あたかもカマドへの供献の後、土器とともにカマドを破壊した痕跡であるとも考えられた。灰釉陶器碗の口縁部にも赤褐色の物質が付着していたが、灯明に伴う煤の付着であるか否かは保留しておきたい。このように、カマド上から灯明が出土した御代田町川原田遺跡第6号住居址例(堤他 1993)にみられるカマド祭祀の痕跡とは若干異なるが、本住居址例もカマド祭祀の一例としてとらえられることができる。祭祀が想定されるこれらの遺物とともに注目されるのは、カマド周辺の遺物分布状態である。第1a号住居址のカマド周辺の遺物は完形、半完形品が多く、住居址の規模や出土量、遺物の配列に相違がみられるものの吉田川西遺跡SB32(長野県埋蔵文化財センター 1989)における食器列と類似するものとも考えられる。重要な点は、祭祀に用いられる遺物と、土師器供膳形態の土器の多出という現象が結びついていることである。このような事例は、灰釉陶器耳皿を出土した阿弥陀堂遺跡第I次調査第10号住居址にもみられる。カマドの破壊を伴うカマド祭祀が、住居廃絶に際し普遍的に行なわれたとする堤隆氏の見解(堤 1991)から、本事例を一般的に行なわれた住居廃絶の

祭祀とみるか、多出した供膳形態の土器から、他の住居とは異なり集落内でもひとつの核となる機能を有していた住居とみるかについては今後の課題としておくが、平安時代の村落においても、祭祀行為が集団内の結びつきを強める役割を担っていたと想定することは、あながち間違っていないと考える。第1a号住居址の遺物出土状態と出土量が、他の住居との何らかの差を表わすものとすれば、第I次調査第10号住居址や第V次調査第1a号住居址は住居廃絶以前にも祭祀を媒介として幾つかの小集団を結びつける役割を担っていた可能性が残される。阿弥陀堂遺跡第I次調査での瑞花双鳥八稜鏡の存在も含め、祭祀行為の痕跡と供膳形態の土器の多出という現象の読取り方によって、村落内の祭祀行為と集団関係を探ることができる可能性があると考えられる。

(3) 平安時代の遺構分布と阿弥陀堂遺跡の性格

第V次調査で検出された遺構のうち、注目すべき遺構は掘立柱建物址である。既に第I次調査時に建築址と柱穴列、溝の配置が注意されているが(守矢 1983)、第I次調査の建築址、柱穴列と第V次調査第1号、第2号掘立柱建物址の主軸方向がほぼ直交する(第22図)。いずれの掘立柱建物址とも、時期決定の根拠が遺構間の重複関係によっているため同時存在の確証は得られていないが、計画的に配置されていた可能性も考えられる。茅野市域の平安時代遺跡分布をみると、八ヶ岳山麓一帯には中規模の集落と柳川英司氏の提唱する「散在住居址群」(柳川 1994)が点在する(第23図)。この現象は宮坂光昭氏、白田武正氏によれば、ほぼ10世紀後半から11世紀前半に限られている(宮坂 1985、白田 1986)。さらに阿弥陀堂遺跡の背後に広がる八ヶ岳山麓は古代勅旨牧の比定地でもある。古東山道の存在も含め(今井・伊藤 1973)、阿弥陀堂遺跡が山麓地域を束ねるのに適した位置に立地していること、第V次調査第1号掘立柱建物址が大型の建物址である可能性があることを考え合わせれば、阿弥陀堂遺跡が政治あるいは経済上の核であった可能性を想定できると思われる。阿弥陀堂遺跡の掘立柱建物址の意義を明らかにするために、今後掘立柱建物址と竪穴住居址の関係を把握すること、山麓地域の諸遺跡との時間的な平行関係を明らかにすることが課題となる。また遺跡の広がりをこれまでの調査成果から推定すると、特に永明寺山山麓との間に遺構が広がることが予想される。遺跡の性格を考えるためには、面的な調査が必要であり、現在遺跡が保存されているこの一帯は重要な学術的意義をもつと考えられる。

引用参考文献

- 石井寛他 1990 『山田大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター
 石井 寛 1993 「第3編 1. 堀之内1式期土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡 華蔵台遺跡』(勸横浜市ふるさと歴史財団)
 今井広亀、伊藤正和 1973 「第四章 古代の文化」『岡谷市史 上巻』岡谷市役所
 鶴飼幸雄 1983 「第V章第3節 縄文時代後期の土壌について」『高部遺跡』茅野市教育委員会
 「第V章第4節 高部遺跡出土の平安時代後期の土器様相」同上
 白田武正 1986 「第2章第2節 考古学からみた古代の茅野」『茅野市史 上巻』茅野市教育委員会
 小池岳史 1994 『立石遺跡』茅野市教育委員会
 小林深志 1993 『阿弥陀堂遺跡』茅野市教育委員会
 鋤柄俊夫 1988 「信濃における平安時代後期以降の土器様相」東国土器研究 1
 諏訪史談会 1985 『諏訪藩主手元絵図』
 茅野市教育委員会 1980 『下ノ原遺跡』
 茅野市教育委員会 1986 『茅野市史 上巻』
 堤 隆 1991 「住居廃絶時における竈解体をめぐる一竈祭祀の普遍性の一側面」東海史学 25
 堤 隆他 1993 「川原田遺跡—平安・中世編—」御代田町教育委員会
 長野県埋蔵文化財センター 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 吉田川西遺跡』
 宮坂虎次、守矢昌文 1983 『構井・阿弥陀堂遺跡』茅野市教育委員会
 守矢昌文 1983 「第V章第3節 (1)土器について」「第V章第3節 (4)集落立地について」『構井・阿弥陀堂遺跡』茅野市教育委員会
 宮坂光昭 1985 「第二編第三章第5節 山麓の開拓に入った人たち」『原村誌 上巻』原村役場
 百瀬一郎 1993 『天狗山遺跡』茅野市教育委員会
 柳川英司 1994 「第IV章第1節 稗田頭C遺跡周辺における平安時代後期の散在住居址群について」『稗田頭C遺跡』茅野市教育委員会



▲ 1. 第6号住居址完掘状況（西から）



◀ 2. 第6号住居址礫分布状態（西から）



▼ 3. 第5号住居址（北西から）



▲ 1. 第1a号住居址遺物分布状態（北東から）



◀ 2. 第1a号住居址カマド付近 ▲ 3. 第1a号住居址遺物3.24（東から）

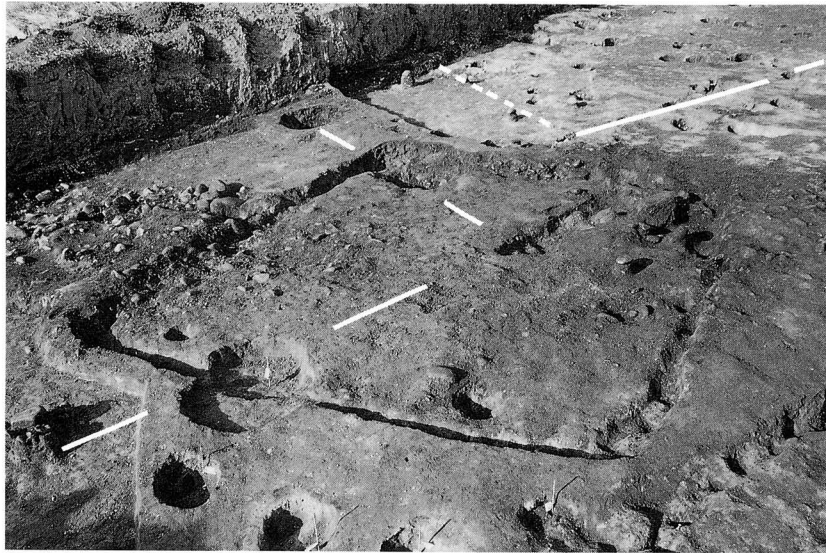


▶ 4. 第2号住居址灰捨て穴遺物出土状態（西から）

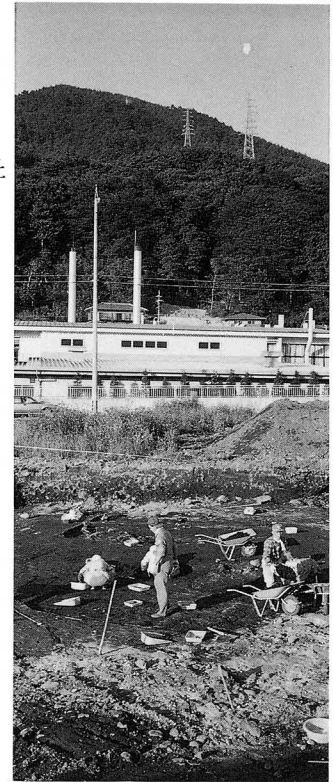


◀ 1. 第2号住居址完掘状況 (南から)

▼ 3. 第2号住居址調査風景 (南から)



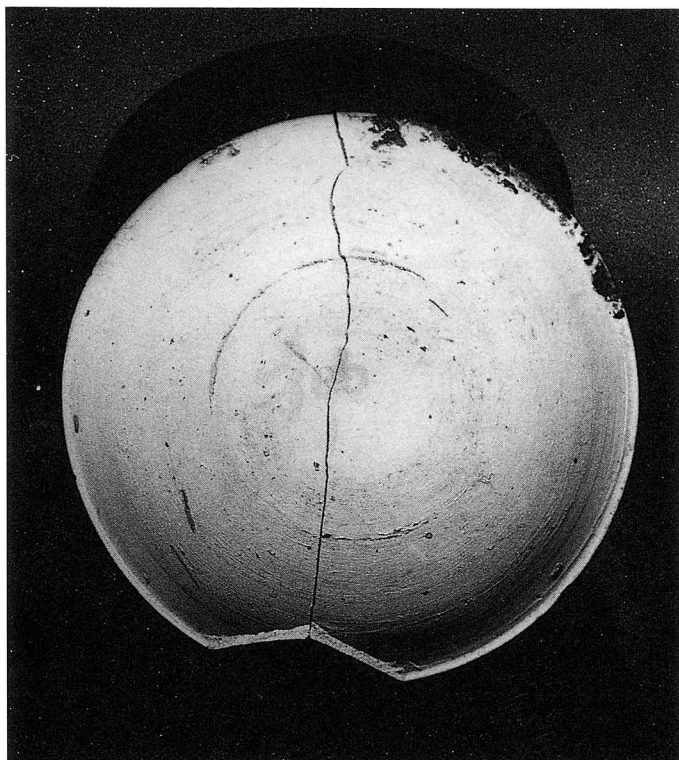
▼ 2. 第4号住居址と
第2号掘立柱建物址
(南から)



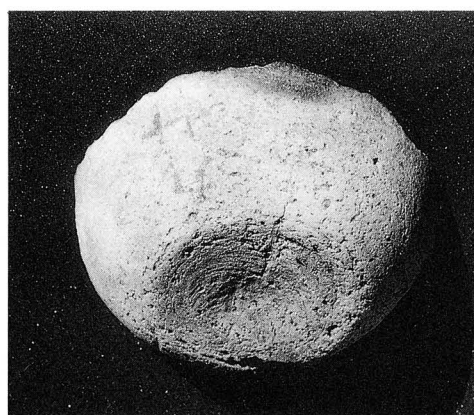
▲ 4. 掘立柱建物址 (手前が第1号、3号、右奥が第2号掘立柱建物址、北から)



▲ 1. 調査区全景 (北東から)

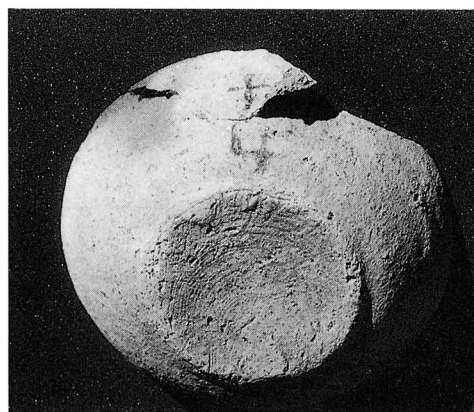


▲ 2. 第 1 a 号住居址遺物32赤外線写真



▲ 3. 第 2 号住居址遺物 2 赤外線写真

▼ 4. 第 2 号住居址遺物 3 赤外線写真



阿弥陀堂遺跡 V

—平成5年度埋蔵文化財第5次緊急発掘調査報告書—

平成6年3月28日 印刷

平成6年3月30日 発行

編集 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
発行 茅野市教育委員会

印刷 長野県長野市柳原2133-5
ほおずき書籍株式会社
